

松井田町文化財調査報告書第7集

五料山岸遺跡

～上信越自動車道(工事用道路)建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査～

1991

松井田町教育委員会



五科山神道跡B区出土須恵器

序

松井田町は南に妙義山が聳え、西は碓氷峠とさらには浅間山の偉容が望まれる一方、東には碓氷川の流れに沿って丘陵と平地が続く水と緑の美しい町であります。古くは東山道が、また中山道の街道筋に栄えた宿場は旅人の心を和ませ、文化交流の場でもあったことでしょう。今なお残る坂本宿や碓氷関所、石碑などは往時の姿を今に伝え、それを礎として私達は歩んでまいりました。

このたび、関越自動車道上越線の建設に伴う工事用道路部分の調査を実施し、新たに2か所の遺跡が発見されました。調査では縄文時代および奈良・平安時代の遺物、遺構など、文献では窺うことのできない時代の足跡が検出されております。これらは、ふるさとの歴史を解明し、それを伝えてゆく私達にとっての手助けとして現存する文化財とともに活用してまいりたいと考えております。

発掘調査から本書刊行に至るまで、多大な御指導、御協力をいただいた関係機関、各位に感謝申し上げますとともに、最後になりましたが本書が原始古代解明のうえで有益となりますことを願い、序とします。

平成3年3月25日

松井田町教育委員会

教育長 宮 下 初太郎

例 言

- 1 本書は、上信越自動車道地域埋蔵文化財発掘調査（工事用道路）の調査報告書である。
- 2 調査は松井田町五科地区（平工用道路）と北野牧地区（運入川工事用道路）の2箇所を実施し、各々「五科山岸遺跡」、「北野牧狐笠遺跡」としたが、北野牧狐笠遺跡では壕出遺構、遺物が極く僅かであったため、本書を「五科山岸遺跡」としてこの中に掲載することとした。
- 3 調査は群馬県教育委員会の委託をうけて松井田町教育委員会が行なった。
- 4 遺跡の所在地は以下の通りである。

五科山岸遺跡	群馬県碓氷郡松井田町大字五科字中ノ池 146-1 他
北野牧狐笠遺跡	群馬県碓氷郡松井田町大字北野牧字狐笠 18280 他
- 5 調査期間

五科山岸遺跡	発掘調査 昭和63年7月4日～11月18日
	整理作業 平成2年4月1日～平成3年3月31日
北野牧狐笠遺跡	発掘調査 昭和63年8月30日～9月14日
	整理作業 平成2年4月1日～平成3年3月31日
- 6 発掘調査は水沢祝彦（松井田町教育委員会社会教育課社会教育主事）が、整理作業は田口 修（同社会教育課主事）が担当した。
- 7 整理作業の分担は以下の通りで田口がこれを補った。

五十嵐朋子………	遺物実測
原田 和美………	遺物実測、遺構図作成
浦野 昇平………	遺物復元、拓本
田口 修………	遺物写真、遺物観察、トレース、編集、他
- 8 執筆はⅠ、Ⅱを水沢、Ⅲ～Ⅴを田口が担当した。
- 9 土質図の胎土分析は（株）第四紀地質研究所に分析、測定を依頼し、井上 巖氏より玉轄を賜わった。
- 10 巻頭カラー写真は武者フォトスタジオで撮影して頂いた。
- 11 出土遺物、資料類は一括して松井田町教育委員会が保管している。
- 12 発掘調査および整理作業にあたっては以下の方々及び機関より御教示、御協力を頂いた（敬称略）。
 新井行雄（松井田町例会）、上原富次（松井田町文化財調査委員）、菊池 実（群馬県埋蔵文化財調査事業団）、小林二三雄（群馬県山岳会連盟）、近藤 功（群馬県教育委員会）、田口 一郎（箕郷町教育委員会）、津金沢吉茂（群馬県埋蔵文化財調査事業団）、平田貴正（山武考古学研究所）、志瀬君江（松井田町文化財資料室）、水田 稔（群馬県教育委員会）、鎌田弘弘（辰野県埋蔵文化財センター）、群馬県教育委員会文化財保護課、日本道路公団富岡工事事務所、調査地区各行政区、（株）美山土木構築
- 13 発掘調査に従事して頂いたのは以下の方々である（敬称略）。

浅川 末子	新井 暁	岡村千代美	小北木殿江	小北木よし子	神戸 孝	神戸 智宏
齋木 恒男	高木 昭二	中島 久	中根高代志	野田 絹子	野田 達也	巖巻 勝司
伏田 和代	松坂 敦	欠野由利子	（五科山岸遺跡）			
秋山 森雄	岩井 儀一	上原 藤男	加藤 巖二	二藤 繁	谷 一 英夫	三田今朝次
山口 一男	（北野牧狐笠遺跡）					

凡 例

- 1 遺構図の縮尺は1:20、1:40、1:80とし各図に記した。
- 2 遺構図その他の部図中の方位記号は座標北を指す。
- 3 遺構断面図の基準線は海拔標高である。
- 4 遺構平面図のスクリーンは焼土範囲を示す。
- 5 遺構断面図のスクリーントーンは軽石層を示す。
- 6 遺物図の縮尺は1:4であり、それ以外のものについては遺物番号横に記した。
- 7 土器は原則として片足以上残存するものを図化したが必要と思われるものについてはこの限りではない。
- 8 遺物区（須恵器）の中心線両側に付した短線は回転ヘラケズリの範囲を示す。
- 9 遺物区（須恵器）断面中の実線は接合部分である。
- 10 遺物観察表中、寸法欄の（ ）は推定値をばし、推定不可能な部位は記載していない。
- 11 遺物観察表中、焼成の程度については焼き締まり、色調などから観察者の主観で記してある。
- 12 遺物観察表中、色調欄については基準となる文献類は用いず、観察者の主観で記した。
- 13 写真図版の遺物写真における縮尺は不統一であり、遺物実測図を参照されたい。
- 14 本文と写真図版の遺物番号は一致する。

目 次

序

例言・凡例

全体目次

図版目次・表目次・写真図版目次

I	調査にいたる経緯	1
II	調査の経過と方法	1
III	遺跡の位置と環境	
	1 地理的環境	2
	2 歴史的環境	4
IV	検出された遺構と遺物	
	1 五料山岸遺跡	7
	2 北野牧狐蓋遺跡	43
V	まとめ	45
	(附編) 五料山岸遺跡出土土器の胎土分析	47
	写真図版	57

図版目次

図1	五科山岸遺跡調査区域	2
図2	北野牧場南遺跡調査区域	3
図3	五科山岸遺跡周辺の奈良・平安時代遺跡	5
図4	北野牧場南遺跡周辺の縄文時代遺跡	6
図5	A区溝平・南濠園	7
図6	A区溝出土遺物	7
図7	B区全体図及び土層断面図	8
図8	B区石直下の石輪山状況	9
図9	溝部下層での石輪山状況及びその断面	9
図10	須恵短頸壺	11
図11	須恵短頸壺1	11
図12	須恵短頸壺2	12
図13	須恵広口壺	12
図14	須恵蓋1	13
図15	須恵蓋2	14
図16	須恵杯(1)	14
図17	須恵杯(2)	15
図18	須恵碗	16
図19	須恵壺(1)	17
図20	須恵壺(2)	18
図21	須恵壺(3)	19
図22	須恵大型壺1	20
図23	須恵大型壺2	21
図24	土師杯	22
図25	土師壺	22
図26	B区ビット出土遺物	22
図27	須恵短頸壺接合区	31-32
図28	須恵短頸壺接合区	31-32
図29	須恵大口壺接合区	31-32
図30	須恵壺接合区	33-34
図31	須恵杯接合区	33-34
図32	須恵埴輪接合区	35-36
図33	須恵壺接合区	35-36
図34	須恵大型壺接合区	35-36
図35	土師杯接合区	37-38
図36	土師壺接合区	37-38
図37	C区1号・2号住居跡	39
図38	C区1号住居跡出土遺物	41
図39	B区グリッド配置図	43
図40	21・22グリッド集石部	43

表目次

表1	五科山岸遺跡周辺の奈良・平安時代遺跡	4
表2	北野牧場南遺跡周辺の縄文時代遺跡	4
表3	A区溝出土遺物観察表	7
表4	須恵短頸壺観察表	23
表5	須恵大口壺観察表	23
表6	須恵短頸壺観察表	24
表7	須恵杯観察表1	24
表8	須恵杯観察表2	25
表9	須恵壺観察表	26
表10	須恵壺観察表1	26
表11	須恵壺観察表2	27
表12	須恵壺観察表3	28
表13	須恵壺観察表	28
表14	須恵大型壺観察表	29
表15	土師杯観察表	29
表16	土師壺観察表	29
表17	B区ビット出土遺物観察表	30
表18	C区1号住居跡出土遺物観察表	41
表19	五科山岸遺跡B区遺物不良品	45

写真図版目次

(五科山岸遺跡 図版1~24)
北野牧場南遺跡 図版25~30)

図版1	その他の調査区トレンチ完掘状況
図版2	その他の調査区トレンチ掘削状況、出土遺物
図版3	A区堀削風景、完掘状況
図版4	A区出土遺物
図版5	B区堀削風景、遺物出土状況
図版6	B区溝部遺物出土状況、短頸壺出土状況
図版7	B区溝部遺物出土状況
図版8	B区溝部石、遺物出土状況、完掘状況
図版9	B区ビット両面、D区完掘状況
図版10	B区須恵短頸壺、短頸壺1~3
図版11	B区須恵短頸壺4~16
図版12	B区須恵広口壺、短頸壺1~12
図版13	B区須恵壺13~27
図版14	B区須恵壺28~40
図版15	B区須恵碗
図版16	B区須恵杯1~16
図版17	B区須恵杯16~31
図版18	B区須恵壺
図版19	B区須恵大型壺、土師杯1~8
図版20	B区土師杯9、土師壺、石、鉄製品、ビット遺物
図版21	C区住居跡確認状況、住居跡遺物出土状況
図版22	C区住居跡遺物出土状況、炭化物出土状況
図版23	C区1号住居跡カマド、住居跡完掘状況
図版24	C区1号住居跡出土遺物
図版25	A区短頸壺全壺、A区全壺
図版26	A区1~3トレンチ完掘状況
図版27	B区堀削風景、グリッド完掘状況
図版28	B区4グリッド、21グリッド集石部出土状況
図版29	B区21グリッド集石部、石除去状況、プラン完掘状況
図版30	B区作業風景

I 調査にいたる経緯

群馬県内における近年の開発は、件数の著しい増加と規模の巨大化に大きな特長が見られる。このような状況下で、松井田町においては種々の民間開発や、工業団地の造成や上信越自動車道、北陸新幹線の建設などの大規模な公共事業が欠けぎ早に進んでいる。

上信越自動車道建設に伴う平工事用道路及び進入川工事用道路の開設が計画され、その実施に伴う該当地域の埋蔵文化財の保護について、群馬県教育委員会より発掘調査実施についての依頼が松井田町教育委員会へ出された。これに伴って、調査は松井田町において実施することとなり、昭和63年6月20日付け群馬県教育委員会教育長と松井田町長の間で関越自動車道（上越線）地域埋蔵文化財発掘調査事業の委託契約が締結され現場作業に入った。その間、工事計画が現道を含めた内容であり、文化財の調査においても考慮すべき点の多いことから、該当地区住民に対する調査方法等の説明と協力依頼のための説明会を開催し、現場作業時における地域住民の安全と生活道路としての機能確保に努めた。

報告書作成を含む整理作業については、新たに群馬県教育委員会よりの依頼を受けて、平成2年4月1日付けで群馬県教育委員会教育長と松井田町長の間で上信越自動車道地域埋蔵文化財発掘調査（工事用道路）「五科・山岸遺跡」の整理事業の委託契約を締結し作業に入った。

事業名及び報告書名については、進入川工事用道路における調査対象の規模がきわめて小さいために平工事用道路（五科山岸遺跡）として包括した。

II 調査の方法と経過

〈発掘調査〉

五科山岸遺跡（昭和63年7月4日～11月18日）

工事対象の区域が一部を除いて現道と重複しているために、発掘調査にあたっては現道を除いた部分の中で一定の平坦面を有す地区を対象として計画を進めた。

現場作業は重機による任意のトレンチ掘削により、該当地区内における遺跡の広がりを把握するように努めた。その結果遺構が検出されたトレンチが3カ所に限られたために、それぞれ東からA・B・C区と呼称し、調査の便をはかった。A区では遺構の検出と平板測量による記録作業を行った。B・C区では工事に伴う幅杭を基準にして1m方眼を組み、遺構の検出と記録作業を行った。各区とも並行して作業を続け、遺物出土量の多いB区での作業の終了により全調査が終了した。

北野牧狐堂遺跡（昭和63年8月30日～9月14日）

計画区域の地形等の表面観察から、調査の実施については工事におけるAルート平坦地を対象として計画を進めた。A区は工事の幅杭を基準としてトレンチを設定した。B区は、工事の幅杭を基準にして2mのグリットを設定し調査を実施し、部分的にローム層内の遺物出土の可能性について調査を実施した。

〈整理作業〉

五科山岸遺跡・北野牧狐堂遺跡（平成2年4月1日～3年3月31日）

整理事業は五科山岸遺跡・北野牧狐堂遺跡とも並行して実施した。遺物の整理作業は、洗浄・注記に始まり、順次接合復元・実測・トレース・拓本・写真撮影・写真及び図版版下作成と進めた。その間に、現場で作成した遺構実測図・調査区全体図等の各種図面類の点検等の作業を並行して行い、トレース・図版版下作成等の遺構関係整理作業を行った。あわせて報告書の割付け・原稿執筆・校正等を経て、印刷を行った。

Ⅲ 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

五料山岸遺跡

松井田町のほぼ中央を川筋とする碓氷川は、その源を長野県境開野の松井田町大字峠にもつ。この山中から発した碓氷川は、山間地またはその麓で南より中尾川・入山川・中木川を、また北からの水谷川・矢の沢・小山沢といった小河川と合流して安中市へと流下する。この兩岸は河床面から数十メートルの河岸段丘面が形成されており、右岸には上位段二（横川付近から安中市へ続く）・下位段丘（五料小竹付近から安中市へ）が、また左岸には中位段丘（五料御所平付近から安中市へ）と呼ばれる段丘面が存在している。これらは川の南に広がる西横野丘陵、北へ広がる松井田丘陵及び細野丘陵と共に町民の居住、生産地域として重要な位置を占めている。

さて、五料山岸遺跡は碓氷川左岸の中位段丘面（河床から約20m）と松井田丘陵の裾部の境界付近に立地する。基盤層は安山岩上で上位を関東ローム層及び後の浮石・火山灰等のテフラが覆い、その上に堆積する黒色土は耕作土として利用されている。地表は北西から南東への緩い傾斜をなし、標高は330m～338mを計る。青丘にあたる松井田丘陵裾部の北斜面からは遺跡地を三分するように沢が流下しており、沢の両脇を中心に水田が、また台地上は桑園や野菜等の畑地として古くから利用されてきている。

南方を流れる碓氷川からは約400mを計るが、同じ中位段丘面であるその中間には国道18号線と信越本線が並走しており、上り線、下り線共に碓氷峠の麓の平坦地として交通の要衝と言えよう。

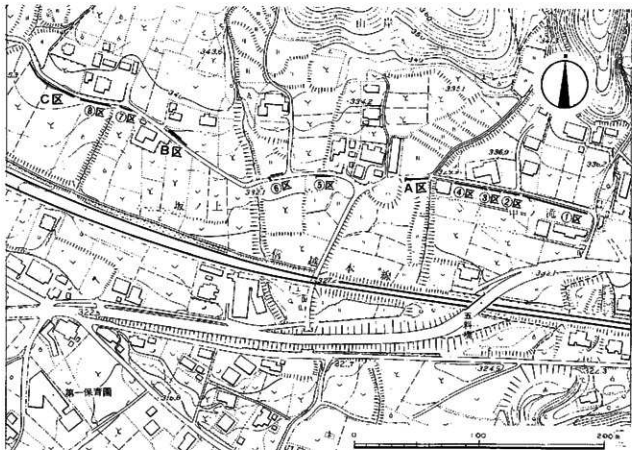


図1 五料山岸遺跡調査区域 (1:3000)

北野牧狐薮遺跡

北野牧狐薮遺跡は松井田町南西部の山間地域にある。

群馬県と長野県の県境を頂点とする矢ヶ崎山（標高 1,184m）から県境接線を南に入山峠（1,085m）を経て桜堂山（1,179m）から北東に延び、稲村山（952,6m）に至る稜線に囲まれる範囲が北野牧地域である。ここは、北西部からの矢崎川、手引沢等、いくつかの小さな流れが、矢ヶ崎山と入山峠の間より流下する遡入川に集まり、さらには南西からの板湯沢と共に入山川に合流して下流で碓氷川となって東方へ進む。これらの河川は総じて急流だが特に県境接線から遡入川に至る間の流れは、その急峻な地形ゆえに基盤層を深く浸食している。

さて、本遺跡はその南西約 900m に頂上をとる稲村山の北東止壁の緩斜面上に立地する。ここはまた遡入川が碓氷バイパスに南接した所の右岸段丘上でもある。標高は遡入川側のA区で 515m、そこから緩やかな傾斜をなすB区では 520m を計り、両区間は約50mである。付近一帯は山間地域のために平坦地は居住区や耕作地として多く利用されているが、本遺跡地に於ても耕作地として古くから利用されてきた土地である。A区から遡入川までは直線距離にして約50m、国道18号線碓氷バイパスへは 150mである。

また、本遺跡北東から碓氷バイパスと分岐して町道33号線が走っている。この道は久保、遡入を流り赤坂地区へと続くが、この沿道は地域住民の居住区となっており、また、古代東山道に於ける入山峠説の推定ルートともほぼ並走している。

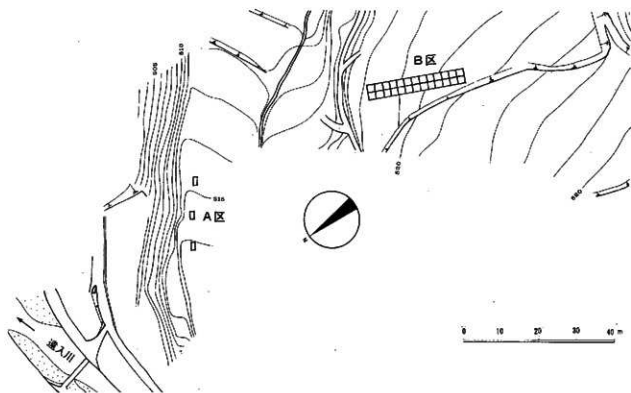


図2 北野牧狐薮遺跡調査区域 (1:1000)

2 歴史的環境

五科山岸遺跡、北野牧狐菰遺跡とともに関連する時代の遺跡または遺物分布の概要を表1、表2及び図3、図4にまとめた。図3の遺跡は7、8、11を除き雄水川段丘面に分布するが、関越自動車道用地の遺跡は五科I遺跡以外は縄文時代が主で奈良・平安時代のまとまった遺構、遺物は見えない。図4では山間地のために開発に伴う調査が少なく遺跡の分布も少ない。が、その中で1、2の敷石住居跡、4の石棒製作址、5の岩陰遺跡と特徴的なものが多く、以前より西野牧地域で確認されていた、石棒の供給地4発見の意義は大きい。

表1 五科山岸遺跡周辺の奈良・平安時代遺跡

No	名 称	概 要	註
1	(五科II遺跡)	縄文時代の配石遺構及び遺物が主体をなすが奈良～平安時代の遺物も検出されている。	1
2	五科小竹	本地点は畑地であり、奈良時代土器器片の他、縄文、古墳、平安時代の土器片が検出されている。	2
3	(五科I遺跡)	奈良・平安時代住居跡とそれに伴う遺物を主とし、他に縄文土器、弥生土器も若干伴う。	1
4	新築西下段	須恵焼、埴、管状土器の他、縄文土器片、子持勾玉なども付託一帯で確認されている。	3
5	(谷戸前遺跡)	縄文時代中期の集落遺跡であるが、古墳及び平安時代の遺物も確認されている。	1
6	(行田II遺跡)	縄文時代中～後期の配石墓群と共に奈良～平安時代の住居跡、掘立柱建物等が30軒検出された。	1
7	荒桑子羅負戸	昭和55年、耕作中に土器器片が出土した。	3
8	曼古山遺跡	住居跡5軒が検出されており、うち1軒の敷家跡では多種の生活用品が炭化状態で共に残存。	3
9	松井田工業団地遺跡	古墳時代から平安時代までの集落遺跡で一部奈良時代の住居跡も存在する。	4
10	久見北原遺跡	平安時代住居跡3軒が検出された。他に古墳時代住居跡1軒、江戸時代道路跡遺構、縄文土器片。	5
11	東山遺	本町に於ては明永峠及び入山峠ルート2区以外のコースについては概ね見解の一致をみている。	6

表2 北野牧狐菰遺跡周辺の縄文時代遺跡

No	名 称	概 要	註
1	仁山遺跡	敷石住居を含む縄文時代住居跡6軒と平安時代住居跡3軒が検出されている。	7
2	藤井遺跡	敷石住居を含む縄文時代住居跡4軒と環状列石、平安時代住居跡1軒、中世遺跡、石垣等。	7
3	花野牧遺跡	縄文時代加賀乳石式期の土器が検出されている。	3
4	(御賀遺跡)	縄文時代中期の石棒製作場で出土した石棒は完成及び未完成品を含め120余点。他に住居跡。	1
5	子取木遺跡	昭和48年に岸と町で調査した岩陰遺跡。縄文～平安時代の遺物が多数検出された。県指定史跡。	3

註1 松井田町遺跡調査会による関越自動車道地域の遺跡である。未報告だが、氷解を頂き調査した。なお()は事業名で正式名称は後日決定する。

註2 松井田町教育委員会の分布調査による。

註3 『松井田町誌』松井田町歴史編さん室 1985

註4 『松井田工業団地遺跡』松井田町教育委員会、群馬県企業局 1990

註5 『久見北原遺跡』松井田町教育委員会 1990

註6 『歴史の道調査報告(栗山地区)』群馬県教育委員会 1983

註7 『仁山遺跡、藤井遺跡』群馬県教育委員会、(財)群馬県歴史文化財調査事業団 1990

※ 10の東山遺を除き、「遺跡」と付いていないものに関しては未調査である。

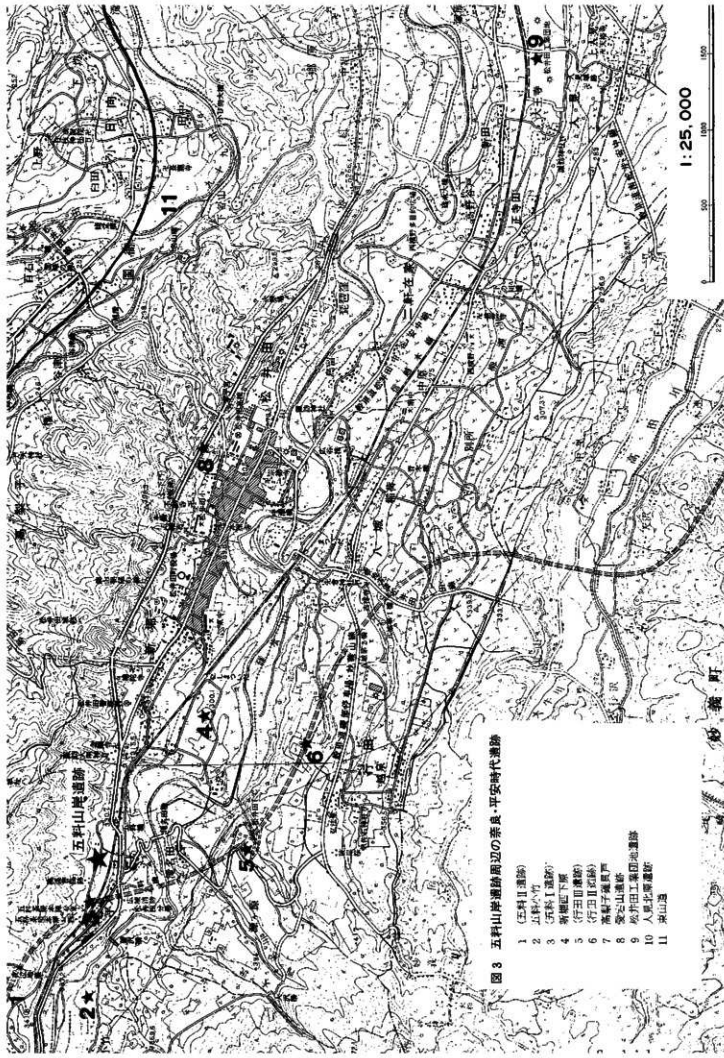


図3 五科山岸遺跡周辺の奈良・平安時代遺跡

- 1 (五科山遺跡)
- 2 五科小竹
- 3 (五科江遺跡)
- 4 新羅区下屋
- 5 (行田山遺跡)
- 6 (行田山北遺跡)
- 7 高野子種真戸
- 8 安志山遺跡
- 9 松井田工業団地遺跡
- 10 人形北塚遺跡
- 11 東山遺



〈A 区〉

区域西側より溝が検出された。本区では北西から南東への緩傾斜をなすが、溝はその軸をほぼ南北にとっており、北から南への比高は溝下部で約30cmであった。確認度は現地表より約20cm下のローム上面で、プランは多少の凸凹はあるがセクションをみた南壁部では1.45mを割り、その断面は上端より50cm弱の深さの築削状を呈していた。ただ、下期に関しては非常に不安定で断面形の断定は出来ない。

石及び遺物は主に覆土層より検出されている。石は上端からなだらかに落ちて溝底部へ向かう肩口付近のレベルを中心に径45cm～10cm未満のものがまとまっており、組まれていた状況ではない。遺物は溝斜面から底部近くで比較的土面に近いレベルでの出土である。須恵坏底部片、埴底部片、蓋体部一口縁部片、甕石の計4点が検出された。

本溝の性格に関しては、確認されたのがその一部にすぎないために判断し得ないが、底部分のプランの不安定なことや石の検出状況等から自然流路的なものではないかと思う。またその時期は遺物より概ね平安期には存在していたと言える。

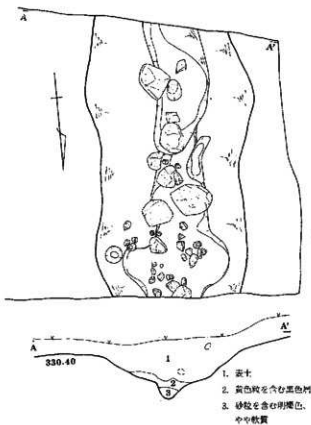


図5 A区溝平・断面図(1:40)

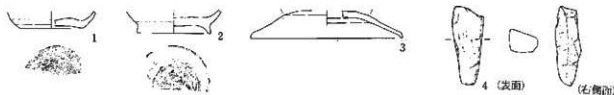


図6 A区溝出土遺物

表3 A区出土遺物観察表

①口縁 ②底片(3はつまみ片) ③断面 ④最大径

No	副 種	法	量	形 態・手 法・焼 成・他	色 調	残 存
1	須恵坏	④ — ⑥ (6.6)	④ — ⑥ —	底部は上げ葺状に内面に裏状に突出する。回転糸切り無磨製。焼成良好。	灰 色	20%
2	須恵埴	④ — ⑤ (7.7)	④ — ⑥ —	底部肥厚。回転糸切り後合部貼り付け回転ナグで雑な仕上げ。焼成は軟質でちろい。	白灰色	20%
3	須恵蓋	④ (16.0)	④ —	返りのない口縁で体部は外反状に削られている。天井部回転ヘラケリ。焼成良好。	灰 色	30%
4	砥 石	全長 8.2 厚さ 2.3 重量 80g		全面に磨痕をもつ断面台形の砥石。縦横は縦横に入っており、全面よく磨耗している。石質は凝灰岩。上部欠損。	茶灰色	—

〈B区〉

五料山岸遺跡西側の町道北調査区である。地表の標高は区中央部で337mを計り、西→東への緩やかな傾斜をなしている。

本区では地表より約1.5mの深さでB軽石純層(註)が検出され、20~50cmの厚さで堆積していた。B層直下の黒色土層(図7断面図の4層)においてはその上位から下位にかけて土器と礫が検出された。分布は西側のA-2、A-3グリッドを中心としてほぼB×全域にわたり、下位からの出土が比較的多い。

A-3、B-3グリッドの遺物集中部東側では溝状遺構が検出された。覆土と共に土器と礫が重なり合って埋没し、特に溝下部西縁側は礫が集中するが埋まれた状態ではなかった。主軸方向は概ねN-35°-E、規模は確認面の先端で約2.5m、下梁では1.5m強、深さは確認面より西で80cm、東で30cmである。これは溝が7、6、5層と埋没し、4層が堆積する時点においては現在と同様に西から東への傾斜地であったことを示している。溝断面の形状は全体に緩やかなボウル状を呈す。地山は覆土同様に基本的には黒色土であるが、覆土よりやや黄色がかりしりもしっかりとしていた。底面の状況、下層の覆土等からは流水の痕跡は検出されていない。

A-6グリッド部よりピットが1基検出された。確認面は溝部と同様、4層直下である。平面形は1.1m×1.25mの不整形形を呈す。断面はボウル状で中央での深さは約28cmを計る。覆土は2層確認出来、上層は黄褐色粒子を含む黒色土、下層はそれよりもやや黄色に強みがある。下層より須恵焼片、壺片が出土しているがいずれも小片である。

遺構の性格については、溝状遺構の遺物が奈良期の所産と考えられ、これらは下層から上層までの時期差がほとんど見られていないことから、ある時期に礫とともに土器が大量に入り込んでいるとみえる。出土土器の状況、観察より廃棄場所との可能性が考えられ、これは後述する。また、ピットは覆土遺物の時期は不明確ながらその覆土および確認面が溝部と一致し、同時期と考えておく。

(註) 浅間B軽石層、1108年降下とされる。

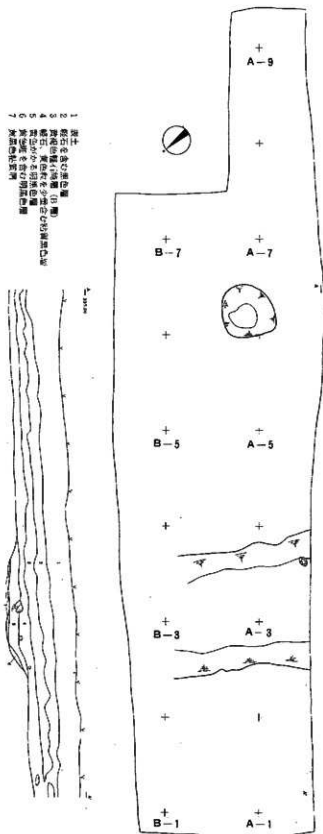
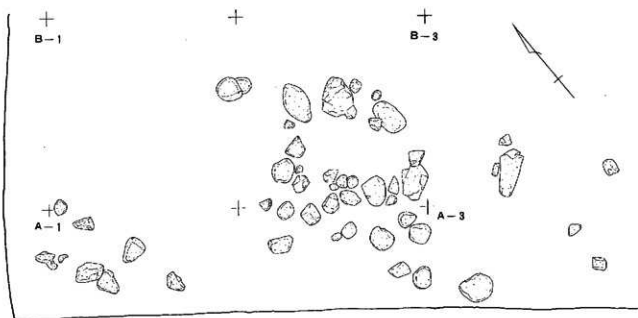
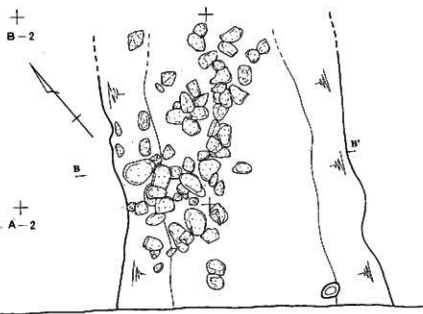


図7 B区全体図及び土層断面図(1:80)



(上) 図8 B軽石直下の石検出状況
(1:40)



(右) 図9 溝部下層での石検出状況
及びその断面 (1:40)



本区では溝状遺構の西側を中心に土器及び礫が大量に出土している。土器についてはそのほとんどを須恵器が占め、土師器はごく僅かであった。器種別にみても以下の通り。

- ・須恵短頸壺 16 ・須恵短頸壺蓋-11 ・須恵広口壺 3 ・須恵坏-31 ・須恵埴-13 ・須恵蓋-40
- ・須恵甕-12 ・須恵大型壺-4 ・土師坏-9 ・土師甕-6 (計 145点) (他にビッド遺物 2点)

以上は本書に掲載した点数であり、他にも破片数では数百点にのぼる。

さて、これらの接合し得た破片の平面位置を図27～図36にドットで示した。出土レベルは図7の第5層から第4層にかけてである。状況としては溝部内側より溝にかけてなだれ込むようであり、また同一個体の破片が比較的距離をおいて検出されており、特に須恵短頸壺7、須恵蓋26、須恵坏12などは9m～7mを計る。1個体あたりのドット数(破片数)は当然の事ながら大型品は多く、小型品ほど減少する傾向にある。

次に器種別に出土土器を概観する。紙面の都合上、詳細は観察表等を参考されたい。

須恵短頸壺は肩に稜を有する1以外は全体になだらかで台部は断面長方形、平行四辺形、外縁を有する三角形に近いものに大別される。体部下位は概ね回転ヘラケズリで仕上げている。短頸蓋は体部が外傾、垂下、11唇部の面取りの有無等、また天井部に回転ヘラケズリ痕を有するものと回転糸切り痕を有するもので分類される。なお、11は短頸壺1とセット関係にある。広口壺は口縁形態が各々異なり、また3の体部下半には平行引き目を残している。須恵坏は台部を有する1～3と削り出し擬似台部の4以外は合が付かない。底部回転ヘラ切り～ヘラケズリの1～22と糸切りの23～31とに大別される。須恵埴も底部の切り離しに2種あり、大型の1～3、5、6、8と小型の9～13、中型の7、深さ、台部の異なる4が存在する。蓋は返りを有する32～40と行きない1～31、つまみ形態、また大きさで大別されよう。須恵甕は大型～小型があり、12は全体にカキ目をもつ。大型壺は把手台部付の1が他と区別される。土師器は甕2、3が球胴と思われ、4、5は小型品。坏は1～5が薄手で6～8は厚手の平底を呈す。5は底部外面に「本」の墨書、6は体部内面に放射状暗文を施す。9は大型高坏の坏部と思われる。

以上の土器には実見で不良品と思われるものが多く含まれる。焼成時のヒビ、歪み、割塵、異物の付着等である。観察表では焼成の程度を焼締状態及びその色調によって記してあるので、上記のようなものについても「良好」とした。これらの土器については「まとめ」の欄で触れることとする。

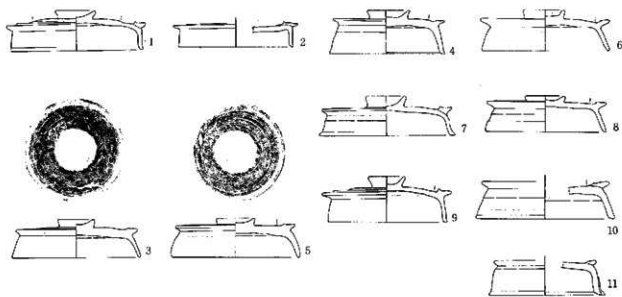


図10 須恵短頸壺蓋

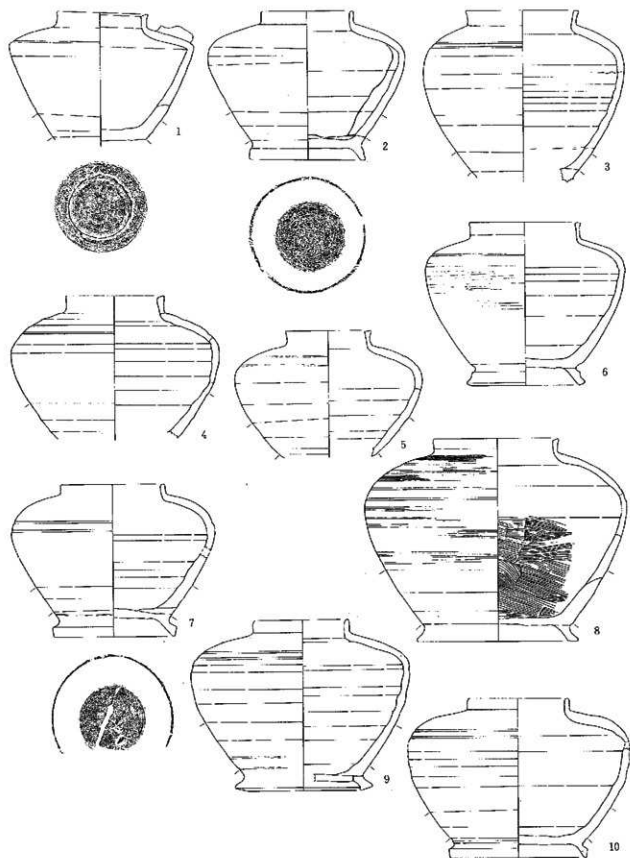


图11 須恵短頸壺(1)

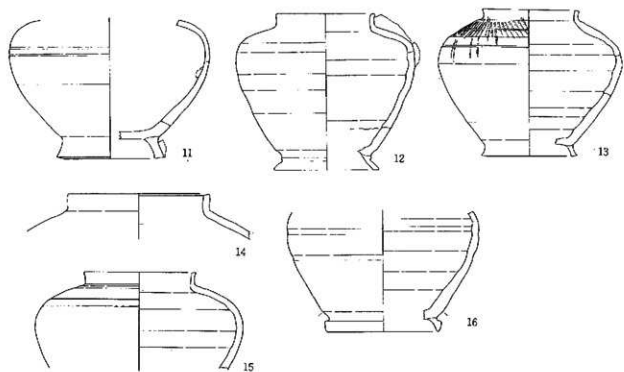


图12 須恵短頸壺(2)

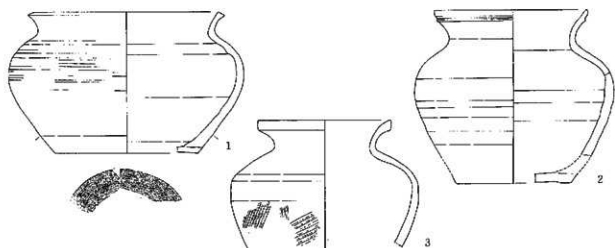


图13 須恵広口壺

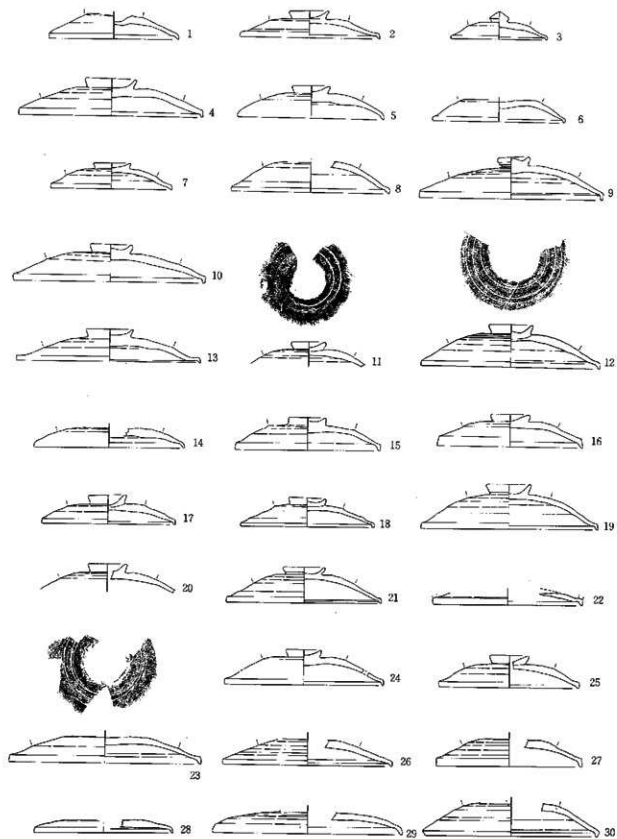


图14 須惠蓋 (1)

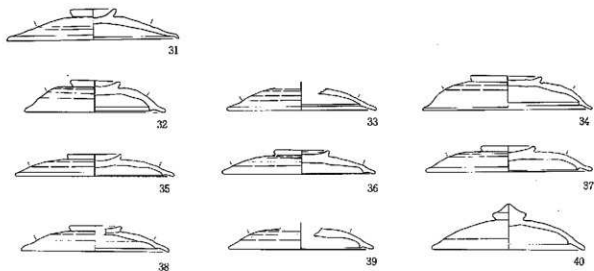


图15 須惠蓋 (2)

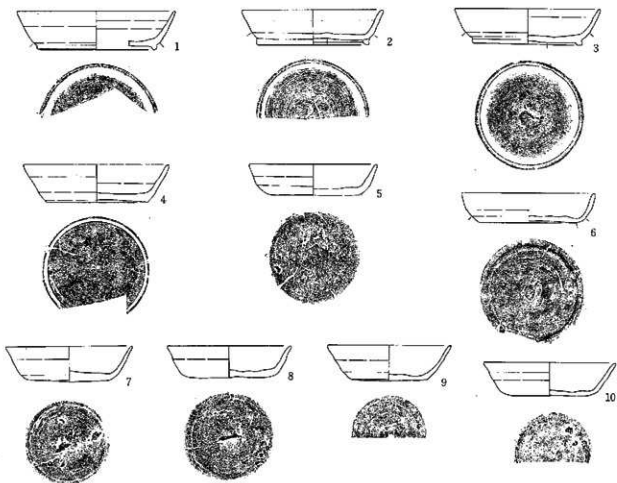


图16 須惠杯 (1)

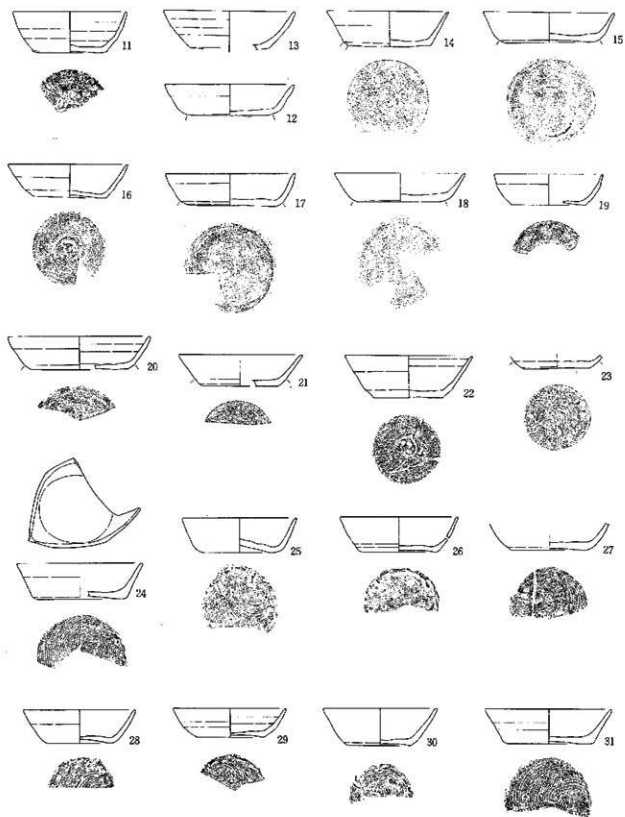


图17 須惠环 (2)

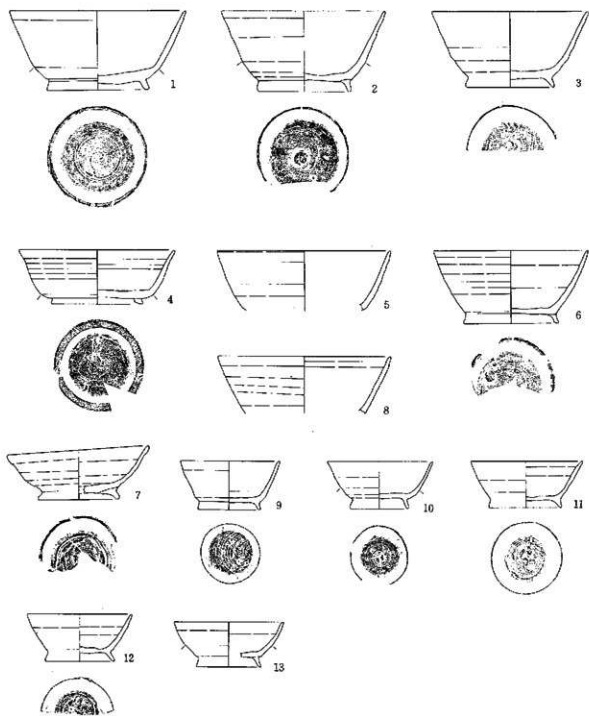


图18 须惠坑

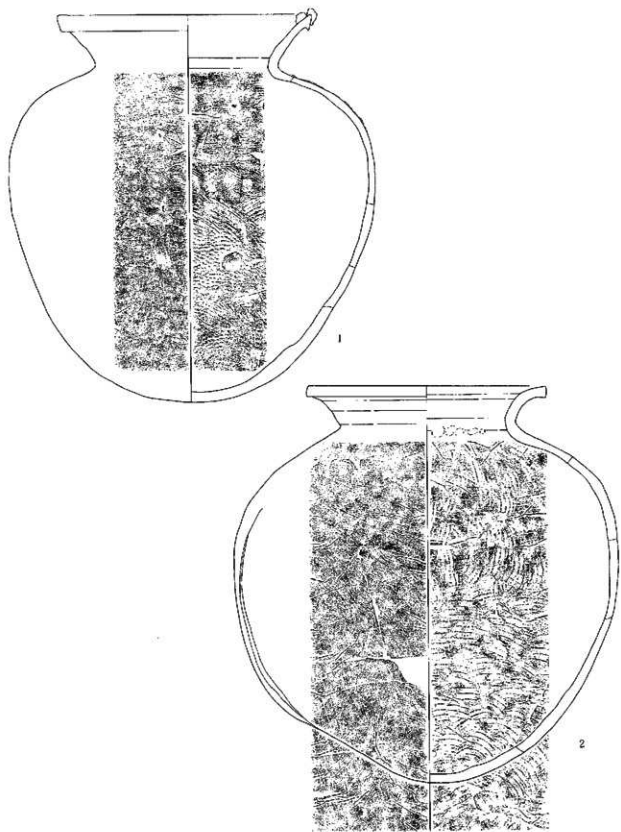


圖19 須惠甕 (1)

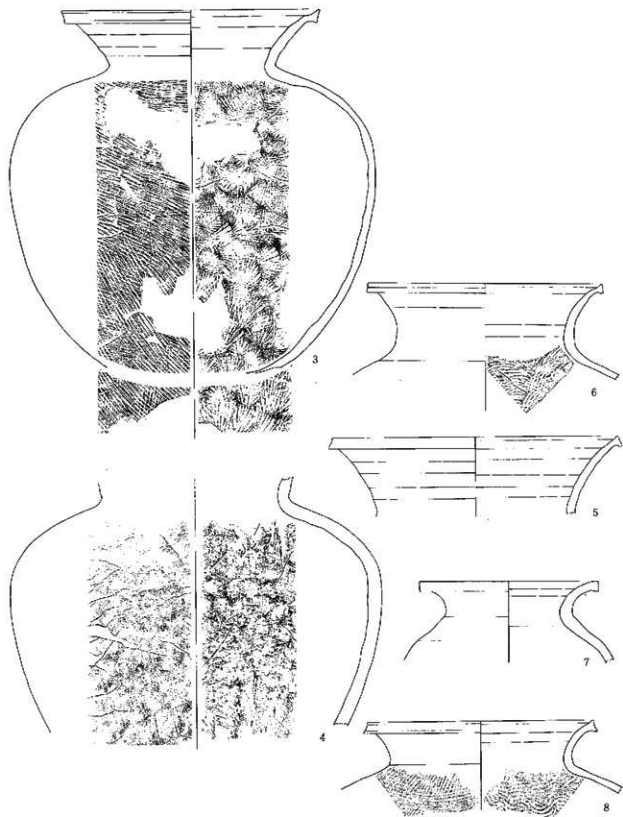
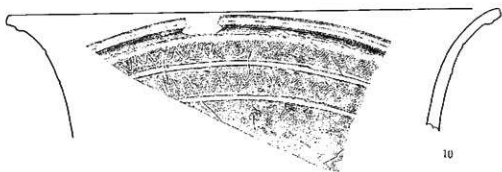


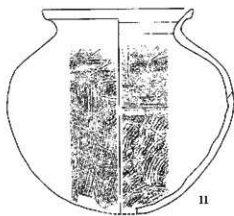
图20 須惠甕 (2)



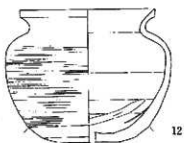
9



10



11



12

圖21 須惠甕 (3)

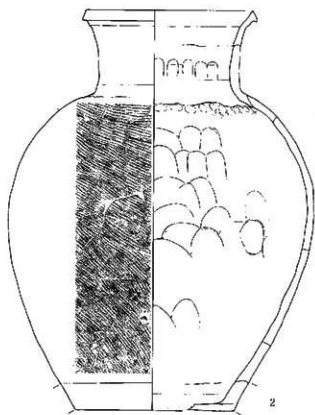
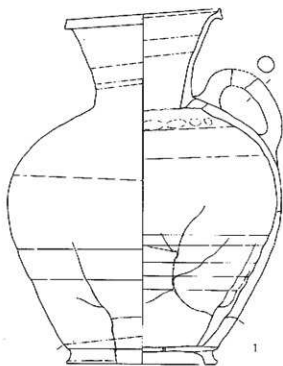


圖22 須惠大型壺 (1)

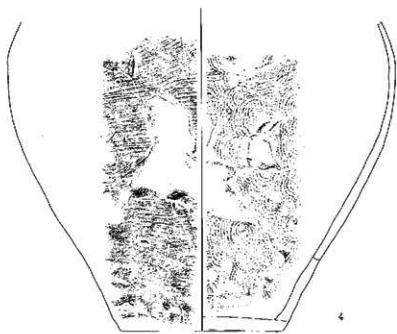
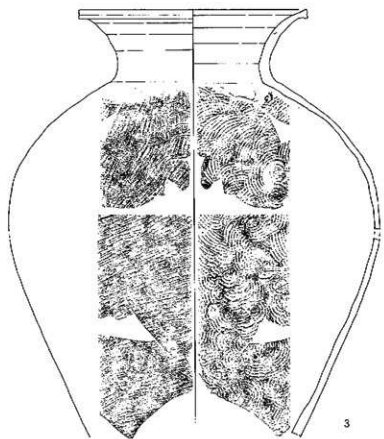


图23 须惠大型壶 (2)

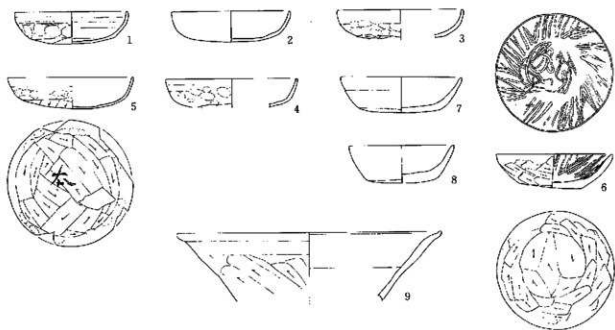


図24 土師 坏

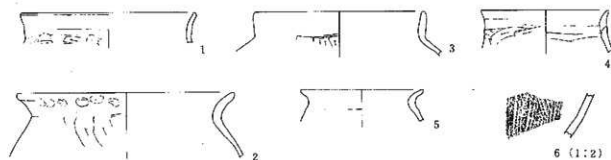


図25 土師 甕

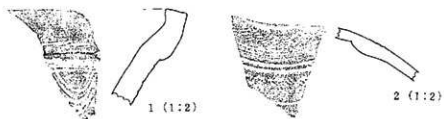


図26 B区ビット出土遺物

表4 須恵畑壙観察表

④口徑 ⑤底徑 ⑥断高 ⑦最大径

No	法 量	形 態・手 法・焼 成・備	色 調	残存
1	④ 9.5 ⑤ — ⑥ — ⑦ 19.6	口唇部は内斜面取りで内曲する肩部縁辺には沈線が通る。肩部には自然釉がかなり黒色塗着物と別個体の粒土粒が付着。蓋部は11を被せて焼成されている。	灰色	80%
	④ 9.7 ⑤ 11.8 ⑥ 15.8 ⑦ 21.0	全体に厚手で内部外面には弱い被をもつ。体部下位回転ヘラケズリ。底部外面は台部貼り付け後の回転ナダが中心まで及ぶ。底部から体部内面形成時のヒビ。	灰色	70%
3	④ 12.0 ⑤ — ⑥ — ⑦ 21.3	口唇部直取り。肩部は平行沈線が通る体部下位は回転ヘラケズリ。肩部と体部下位内面に輪溝あり。焼成良好。	灰色	80%
	④ 10.5 ⑤ — ⑥ — ⑦ 22.3	口唇部内斜面取りで口縁内面は内曲する。肩部には平行沈線が通る。体部下位回転ヘラケズリ。焼成良好。	暗灰色	60%
5	④ (9.0) ⑤ — ⑥ — ⑦ 20.0	口唇部内斜面取りで口縁内面は内曲。肩部には強い平行沈線が通る。体部下位回転ヘラケズリ。焼成軟弱で部分的に割離している。	灰色、断面内面赤灰色	60%
	④ 11.8 ⑤ (11.5) ⑥ 17.1 ⑦ 21.2	口唇部直取り。肩部から体部中位までカキ目調整で上位には平行沈線状のための沈線がある。台部の接合部は強い回転ナダ。肩部外面は鈍灰釉付着。	灰色	60%
7	④ (11.1) ⑤ 12.8 ⑥ (16.0) ⑦ (21.8)	肩部に平行沈線が通る。体部下位回転ヘラケズリ。台部は大きく外縁し外面は被をもつて脆入する。蓋部外面はぬぐいで外面は台部との接合部を回転ナダ。	暗灰色	50%
	④ (13.3) ⑤ (17.0) ⑥ (21.3) ⑦ 28.0	大型。台部断面は平肌。肩部から体部中位はカキ目で下位は回転ヘラケズリ。体部中位から口唇部間は手持ちナダ。肩部の沈線は浅い。部分的に割離。	白灰色、断面は赤灰色	70%
9	④ 10.2 ⑤ (12.0) ⑥ 18.0 ⑦ 23.2	外縁する台部は急造地内側で深い。肩部には平行沈線が通る。体部下位は回転ヘラケズリ。下位の沈線状のみは意図的ではないと思われる。焼成良好。	灰色、内・断面赤灰色	60%
	④ (11.0) ⑤ 14.5 ⑥ 16.8 ⑦ (23.6)	台部は外面に被を有す。肩部は平行沈線が通る底部全面から体部下位にかけて回転ヘラケズリ。底部内面中央には指押えの指紋残る。焼成良好。	暗灰色	50%
11	④ — ⑤ 11.3 ⑥ — ⑦ (21.4)	肩部から体部の境に強い平行沈線が通る。台部は断面長方形で高い。内外面ともに自然釉に覆われ一部には塗着物が付着。焼成は非常に硬質。	暗灰色	30%
	④ (10.0) ⑤ (11.7) ⑥ 16.4 ⑦ 19.0	口唇部内斜面取りで薄手の台部は急造地平肌。焼成は非常に硬質で肩部の一部には自然釉？の塗着及び全面に自然釉が付着する。内面にも黒色粒子の発泡がみられる。	黒灰色、断面暗赤灰色	50%
13	④ 10.2 ⑤ (9.1) ⑥ 15.4 ⑦ 19.7	口唇部外斜面直取り。肩部から体部半位にかけて平行沈線の形を、回転ナダで体部の印き目はほとんど残らない。肩部に間隔3mmの平行沈線。	暗灰色、断面暗赤灰色	50%
	④ (15.0) ⑤ — ⑥ — ⑦ —	大型短頸壙。口唇部は内斜面取り。	灰色	10%
15	④ (11.8) ⑤ — ⑥ — ⑦ (22.1)	肩部は平行沈線が通るが外側は不明瞭である。肩部外縁暗灰色のために白濁する。	灰色	20%
	④ — ⑤ (12.0) ⑥ — ⑦ (20.4)	体部中位から下位は回転ナダ後に手持ちナダ。下底部は回転ヘラケズリ。焼成良好。	灰色	30%

表5 須恵広口壙観察表

④口徑 ⑤底徑 ⑥断高 ⑦最大径

No	法 量	形 態・手 法・焼 成・備	色 調	残存
1	④ (21.0) ⑤ (15.2) ⑥ 15.0 ⑦ 25.0	断高の割に二・底径が大い扁平な大型壙。口縁は外側に鋭く直取り。肩部から体部にかけてカキ目、以下は手持ちナダで底部から体部下位回転ヘラケズリ。	白灰色	40%
	④ 16.2 ⑤ (12.2) ⑥ (18.2) ⑦ 21.2	口縁は長く外反し上部に強い尖角が通る。底部片は接合面で円状に欠損する。	灰色	50%
3	④ 14.2 ⑤ — ⑥ — ⑦ (20.0)	頸部は強くくびれ口縁は大きく外反し外斜面取り。肩部から体部上位回転ナダで以下は平行印き目を僅かに残す手持ちナダ。焼成良好。	白灰色	40%

表6 須恵短型査査観察表

④口径 ⑤つまみ径 ⑥體高 ⑦最大径

No	法	量	形 態・手 法・成 成・他	色 調	残存
1	④ 14.0 ⑤ 4.3 ⑥ 4.2 ⑦ 15.0		ボタン状つまみ。肩部に最大径をもち、上部の突出は鋭い。口唇部は面取り。天井部回転ヘラケズリ。外周全体は薄灰粒で黄灰色。焼成良好。	灰 色	90%
2	④ 12.2 ⑤ 一 ⑥ 一 ⑦ 13.3		肩部は薄く水平に張り、最大径となる。貼り付けは鈍。天井部は全く張りをもたない。口唇部は内側に面取り。焼成良好。つまみ部欠損。	灰 色	80%
3	④ 13.5 ⑤ 3.9 ⑥ 4.1 ⑦ 一		ボタン状つまみ。天井部から肩部は厚く口唇は外傾する。天井部は回転糸切りで、部に痕跡を残す。焼成良好。	灰 色	70%
4	④ 12.4 ⑤ 4.5 ⑥ 4.6 ⑦ 一		ボタン状つまみは中央少々突出。口唇部は内側に面取りされ、全体的に厚手。天井部回転ヘラケズリで肩部との境の指ナデは深い。焼成良好。	灰 色	90%
5	④ 13.6 ⑤ 4.1 ⑥ 4.2 ⑦ 一		ボタン状つまみは中央少々突出。天井部は厚く平型。天井部回転糸切り後に回転ヘラケズリで一部に糸切り痕が残る。焼成良好。	灰 色	70%
6	④ 13.5 ⑤ 4.4 ⑥ 4.3 ⑦ 13.9		ボタン状つまみ内側は深いナデ。肩部は大きく上向きで最大径となる。口唇は外傾。天井部回転ヘラケズリ。焼成良好。	灰色、断面は赤灰色	90%
7	④ 14.5 ⑤ 4.3 ⑥ 4.2 ⑦ 一		ボタン状つまみ。口唇は外反し、口唇部は面取り。焼成良好。	暗茶灰色、断面赤灰色	70%
8	④ (12.8) ⑤ 4.3 ⑥ 3.7 ⑦ 一		ボタン状つまみは中央少々突出。天井部は平坦で肩部は上向き。口唇は外傾する。天井部回転ヘラケズリで内面にはぬぐい度あり。焼成良好。	暗灰色、断面は赤灰色	60%
9	④ 12.8 ⑤ 3.9 ⑥ 4.8 ⑦ 13.8		ボタン状つまみは中央少々突出。天井部は丸みをもち、外側は回転ヘラケズリ。肩部に最大径をもつ。口唇部は面取り。焼成良好。	灰 色	70%
10	④ (15.0) ⑤ 一 ⑥ 一 ⑦ 一		厚手でやや大ぶり。肩部は上向きで接合後のナデは鈍。口唇は外傾し、口唇部は外側に面取りされる。焼成良好。	灰 色	20%
11	④ (12.0) ⑤ 一 ⑥ 一 ⑦ 一		全体に厚手で口唇部は外側に面取りされる。外周全体は自然釉の高少々光沢をもつ。威著物の状態より短型第1の型として焼成されたことが分る。焼成良好。	暗灰色	30%

表7 須恵短型観察表(1)

④口径 ⑤体径 ⑥体高 ⑦最大径

No	法	量	形 態・手 法・成 成・他	色 調	残存
1	④ (16.9) ⑤ (12.0) ⑥ 4.1 ⑦ 一		削り出しと思われる台座を伴う台付環。体部下段に回転ヘラケズリを施し、基部は回転ナデのみで切り方は不明。焼成良好。	灰色、断面は茶灰色	30%
2	④ (15.0) ⑤ 11.8 ⑥ 3.7 ⑦ 一		丸みのない短い体部。基部は回転ヘラケズリ後、体部下段まで回転ヘラケズリを施し、肩部は緩な貼り付け。内外断部分的に粉灰粒。焼成良好。	灰 色	50%
3	④ (15.5) ⑤ 11.7 ⑥ 3.8 ⑦ 一		基部回転ヘラケズリ後、中心部を残して体部下段まで回転ヘラケズリ。肩部は貼り付けと思われる。焼成良好。	灰 色	70%
4	④ (15.4) ⑤ 10.8 ⑥ 4.0 ⑦ 一		基部全面に回転ヘラケズリを施し、縁切部は深く削り込んで盤台状を呈す。外面及び内面の一部には薄灰粒が付着しザラつく。焼成良好。	灰 色	60%
5	④ 13.5 ⑤ 9.5 ⑥ 3.3 ⑦ 一		全体にやや小ぶりで厚手。基部回転ヘラケズリ後、緩な回転ナデ及びぬぐい。内面中央は回転ナデがなされない。焼成良好。	灰 色	70%
6	④ 14.3 ⑤ 10.3 ⑥ 3.1 ⑦ 一		基部回転ヘラケズリ後、体部との境を1〜2周回転ヘラケズリ。体部は浅め。焼成良好。基部内面の一部に粘土粒が付着。	灰 色	80%
7	④ (13.3) ⑤ 8.8 ⑥ 3.6 ⑦ 一		基部回転ヘラケズリ後、縁切部を僅かに回転ナデ。中心部が少々突出するために基部は不安定。焼成良好。	灰 色	60%
8	④ 13.2 ⑤ 9.3 ⑥ 3.4 ⑦ 一		基部回転ヘラケズリ後、全面にぬぐいを施す。基部内面はらせん状の回転ナデが非常に明瞭。口唇は外反する。基部やや不安定。粘土粒が表面にザラつく。	暗灰色	80%
9	④ (13.2) ⑤ (8.0) ⑥ (3.7) ⑦ 一		全体に厚手で体部大きく外反。基部回転ヘラケズリ後、全面にぬぐいを施す。焼成良好。	灰 色	40%
10	④ (14.0) ⑤ 8.0 ⑥ 3.6 ⑦ 一		基部回転ヘラケズリ後、部分的にぬぐいで粘土粒が少々付着している。焼成良好。	灰 色	40%
11	④ (12.2) ⑤ (8.0) ⑥ (4.4) ⑦ 一		厚手で丸をもつ体部。表面は全体に滑らか。基部回転ヘラケズリ後、部分的にぬぐい。焼成良好。	白灰色	30%

表8 須恵環観察表(2)

①口径 ②底径 ③器高 ④最大径

No.	法 部	形 態・手 法・焼 成・他	色 調	残存
12	①(13.8) ②(9.0) ③(3.3) ④—	底部回転ヘラ切りと思われ、全面に黒色の砂粒状雜質物あり。焼成良好。	灰 色	40%
13	①(14.0) ②(8.4) ③(4.2) ④—	全体に丸みをもって深くすち上げる体形。底部は回転ヘラ切りと思われ、残存する縁辺部はぬぐいがなされている。焼成良好。	灰 色	40%
14	①(13.0) ②(8.8) ③(3.8) ④—	体部に直線的に外縁に口縁は薄い仕上がり、底部中央少々突出し不安定。底部回転ヘラ切り後、体部との隙を1周縁回転ヘラケズリ。焼成良好。	灰 色	50%
15	①(14.0) ②(9.5) ③(3.7) ④—	底部は厚手で回転ヘラ切り後、縁辺部まで全面を回転ヘラケズリ。焼成良好。表側全体に黒色の発泡雜物が露出し、底部外面には径5cmの半円状に粘土付着。	暗灰色、断面は赤灰色	70%
16	①(12.8) ②(8.0) ③(3.5) ④—	全体に薄手でシャープなつくり。底部回転ヘラ切りで縁辺部はぬぐいと思われる。外面は薄灰釉の付着で赤灰色を呈し、底部内面部分的に紫灰色のしみ有。	灰 色	70%
17	①(13.8) ②(9.3) ③(3.4) ④—	底部回転ヘラ切り後、縁辺部まで全面を回転ヘラケズリ。	暗灰色、断面は赤灰色	50%
18	①(14.0) ②(9.0) ③(3.0) ④—	底部は厚く体部に強く外傾する。底部回転ヘラ切り後、縁辺部まで全面を回転ヘラケズリ。表側全体に黒色の発泡雜物が露出する。焼成良好。	暗灰色、断面は赤灰色	50%
19	①(11.6) ②(8.0) ③(3.2) ④—	体部にならかな丸みのある薄手の杯。底部中央付近は厚さ1mm程で欠損しており実用品とは思えない。回転ヘラ切り後、ぬぐい。焼成良好。	灰色、断面は赤灰色	30%
20	①(15.0) ②(10.2) ③(3.5) ④—	底部外面中央と体部下端を回転ヘラケズリ、以降外縁縁辺部に接合度があり、粘土円板を体部に貼り付けて接合部を回転ナデしらしい。焼成良好。	白灰色	20%
21	①(13.0) ②(8.1) ③(3.3) ④—	底部回転ヘラケズリで体部下位まで及ぶ。また、口縁部上面も回転ヘラケズリにより平坦に仕上げる。	灰 色	20%
22	①(13.6) ②(7.5) ③(4.4) ④—	直線的に大きく外傾する体部。底部回転ヘラ切り後、中央を残してぬぐい。酸化焰焼成のため軟質。外面全体は黒灰色。	内・外面は暗褐色	50%
23	①— ②(7.0) ③— ④—	切り際は禁止気味余切りと思われ、その後中心を残して体部下位まで回転ヘラケズリ。強化釉焼成だが焼きまじりはある。ケズリ部に粗砂粒目立つ。	淡褐色	40%
24	①(13.2) ②(9.0) ③(3.8) ④—	しっかりした広い底部より外傾する体部。底部回転余切り後、部分的に縁辺部を手持ちナデ。やや軟質だが焼成は良好といえる。	白灰色	30%
25	①— ②(7.8) ③— ④—	口縁を両側からはさんだようにひどく歪んでいる。底縁回転余切り無調整で外面は薄灰釉のため黄灰色に染る。焼成良好。	暗灰色	40%
26	①(12.5) ②(8.0) ③(3.7) ④—	非常に薄手で硬質。底部回転余切りで残存部の縁辺外縁部の粘土の盛り上がりは、切り直し後に付けられた(付いた)もの。焼成良好。	暗灰色、断面は赤灰色	30%
27	①— ②(8.0) ③— ④—	底部回転余切り無調整。全体に摩擦してあり焼成不良。	白灰色	20%
28	①(12.0) ②(7.0) ③(3.5) ④—	全体に薄手でつくり堅。底部回転余切り後、縁辺部を縁に指押え。焼成良好。	灰 色	40%
29	①(12.0) ②(7.0) ③(3.0) ④—	体部に丸みをもつやや小ぶりの杯。口縁の一部に少々歪みあり。底部中央は薄く、回転余切り無調整。焼成良好。体部内面にぬた成。	暗灰色、断面は暗褐色	30%
30	①(12.0) ②(6.7) ③(3.9) ④—	やや深めの体部。つくりは全体に雑である。底部回転余切り無調整。焼成は軟質で軽量。胎土には粗砂粒が目立つ。	灰 色	30%
31	①(13.4) ②(9.3) ③(3.7) ④—	広量・形態・手法・焼成ともに胎土と酷似するが別製体である。体部外面の一部に火傷が認められる。	白灰色	50%

表9 須恵垣観察表

④口徑 ①直径 ②器高 ③最大径

No.	法 量	形 態・手 法・焼 成・色	色 調	残 存
1	④ 18.8 ⑤ 10.8 ⑥ 8.4 ⑦ —	深く立ち上がる大型埴。首部はしっかりとしたつくりで外反する。底部回転ヘラ切りで内部内側を中程まで回転ナダ。体部下端回転ヘラケズリ。焼成良好。	灰 色	70%
2	④ (17.5) ⑤ 10.0 ⑥ 8.5 ⑦ —	深く立ち上がる大型埴。底部回転ヘラ切りで中心部を残して回転ナダ。体部下位は2〜3周の回転ヘラケズリ。焼成良好。	灰 色	40%
3	④ 16.6 ⑤ (9.5) ⑥ 8.0 ⑦ —	底部回転ヘラ切りで中程までぬくい及び台部貼り付けの回転ナダ。外面の回転ナダは全体に跡で一部に指紋が残る。焼成やや軟質。	灰色、底部 断面赤灰色	40%
4	④ (16.6) ⑤ 9.6 ⑥ 4.8 ⑦ —	口縁が外反する腰の張る浅い埴。底部は回転ヘラ切りで縁辺部を回転ヘラケズリ後、内側に短い内部を付け底部外面全体を露す型転ナダ。焼成良好。	暗灰色	50%
5	④ (18.4) ⑤ — ⑥ — ⑦ —	深い大型埴で体部下位は内側に入る。残存部に回転ヘラケズリ履はない。焼成は軟質で不良。	白灰色	20%
6	④ (16.4) ⑤ (10.0) ⑥ 7.6 ⑦ —	張りをもたずに深く立ち上がる。底部は回転未切りで中程まで台部貼り付けの回転ナダ。焼成は軟質で不良。	白灰色	40%
7	④ 15.0 ⑤ (8.3) ⑥ 5.2 ⑦ —	底部は厚く、首部・体部共に大きく外反する。胎土は粗く回転ナダも確である。底部は回転未切り。焼成良好。	暗灰色	70%
8	④ 18.5 ⑤ — ⑥ — ⑦ —	大型埴。焼成良好。	暗灰色	40%
9	④ 10.6 ⑤ 6.5 ⑥ 5.2 ⑦ —	深く立ち上がる小型埴。底部はゆるい回転未切りと思われ、首部は少々内側に付く。焼成良好。口縁外面は重ね筋の跡が暗灰色を呈す。	黄灰色	80%
10	④ 11.3 ⑤ 6.0 ⑥ 5.0 ⑦ —	厚手の小型埴。底部は回転ヘラ切りで首部は少々内側に付く。焼成良好。口縁から体部内面は赤色がかっており、底部内面は回転ナダの跡がよく残る。	暗灰色	80%
11	④ 11.8 ⑤ 7.6 ⑥ 5.9 ⑦ —	つくりのよい小型埴で首部はシャープに外反している。底部回転ヘラ切り。焼成良好。	黄灰色	80%
12	④ (11.0) ⑤ (7.4) ⑥ (5.0) ⑦ —	小型埴。底部回転ヘラ切りで内面中央には胎土中の小石が露出している。焼成良好。	灰色、断面 は白灰色	30%
13	④ (11.6) ⑤ (6.8) ⑥ (4.8) ⑦ —	開き気味の体部で台部も外反する。体部下半には回転ヘラケズリを露す。焼成良好。	灰 色	30%

表10 須恵蓋観察表 (1)

④口徑 ①直径 ②器高 ③最大径

No.	法 量	形 態・手 法・焼 成・色	色 調	残 存
1	④ 13.8 ⑤ — ⑥ — ⑦ —	つまみ部は欠削し、天井部は内側に大きく突出する。外面は回転ヘラケズリ。体部は張りをもたず口縁には返りなし。口縁外面はナダ跡。焼成良好。	白灰色	90%
2	④ 15.0 ⑤ 4.2 ⑥ 2.9 ⑦ —	ボタン状つまみ。体部は反り気味に開き、口縁部は返りなし。天井部は回転ヘラケズリ。焼成良好。	暗赤灰色	70%
3	④ 10.3 ⑤ 2.0 ⑥ 3.0 ⑦ —	宝珠形つまみの小型蓋。返りなし。天井部は回転ヘラケズリ。焼成良好。	灰 色	60%
4	④ 19.5 ⑤ 5.5 ⑥ 4.0 ⑦ —	ボタン状つまみ。厚手で大型の蓋で返りなし。天井部から体部にかけて回転ヘラケズリ。焼成良好。	灰 色	60%
5	④ (15.6) ⑤ 4.0 ⑥ (3.4) ⑦ —	ボタン状つまみ。天井部から体部中位は極厚で外面は回転ヘラケズリ。口縁は固直せずに開き、返りはない。焼成良好。	灰 色	60%
6	④ (14.0) ⑤ — ⑥ — ⑦ —	天井部は平直で、胎土が粗いため回転ヘラケズリも強い印象をうける。口縁は返りなし。焼成良好。	灰 色	60%
7	④ 13.0 ⑤ 4.0 ⑥ 2.7 ⑦ —	ボタン状つまみで返りはない。天井部から体部にかけて回転ヘラケズリ。表面は粗い胎土と焼成時の発泡物のためにザラつく。焼成良好。	暗灰色	70%
8	④ (16.8) ⑤ — ⑥ — ⑦ —	天井部から体部にかけて丸みをもち、外面回転ヘラケズリ。返りなし。焼成良好。	灰 色	30%

表11 須恵蓋観察表 (2)

①口徑 ②つまみの径 ③高さ ④全径

№	法	寸	形態・手法・焼成・他	色調	残存
9	⑨ 19.4	⑬ 3.5	つまみは蟹足状で大蓋の蓋の側に小さい。犬井部から体部にかけて回転ヘラケズリ。口縁部外面と犬井部を除く内面は重む焼成で黄色の炭酸塩が付着。	灰色	60%
	⑩ 4.9	⑭ —			
10	⑨ 20.2	⑬ 4.5	ボタン状つまみは中央少々突出。大型の蓋で返りはない。天井部から体部にかけて回転ヘラケズリ。焼成良好。	灰色	70%
	⑩ 4.0	⑭ —			
11	⑨ —	⑬ 3.7	ボタン状つまみ。天井部から体部にかけて回転ヘラケズリで、平行沈線状の凹みは粘土に含まれる小石の軌跡跡。焼成良好。	灰色	60%
	⑩ —	⑭ —			
12	⑨ 19.0	⑬ 4.7	ボタン状つまみは中央少々突出。全体に丸みのある人型蓋で返りなし。天井部から体部にかけて回転ヘラケズリで天井部の沈線は意図的と思われる。	白灰色	60%
	⑩ 4.5	⑭ —			
13	⑨ 19.6	⑬ 5.0	ボタン状つまみ。返りのない口縁が外反して屈曲する大蓋蓋。天井部から体部は回転ヘラケズリ、蓋面全体は炭酸物が多くザラつく。焼成良好。	灰色	50%
	⑩ 3.5	⑭ —			
14	⑨ 16.0	⑬ —	天井部から体部は薄層で外面は回転ヘラケズリ。口縁は返りをもたない扁平な蓋。焼成良好。	灰色	40%
	⑩ —	⑭ —			
15	⑨ 15.5	⑬ 4.0	ボタン状つまみは外縁が直に立ち上がり中央少々突出。天井部の回転ヘラケズリは線で返っている。返りなし。焼成は不良で軟質。	白灰色	70%
	⑩ 3.5	⑭ —			
16	⑨ 15.5	⑬ 4.2	ボタン状つまみ。天井部は回転ヘラケズリで口縁外面は長く屈曲する。返りはない。焼成はやや不良。	白灰色	40%
	⑩ (3.4)	⑭ —			
17	⑨ 14.2	⑬ 4.1	ボタン状つまみは中央の凹みが深い。天井部は回転ヘラケズリで口縁は返りをもたない。焼成はやや不良。	白灰色	50%
	⑩ 3.1	⑭ —			
18	⑨ 14.0	⑬ 4.0	ボタン状つまみは中央少々突出。天井部は回転ヘラケズリで体部との境は明確な線を有す。返りなし。焼成良好。内面は黒炭物の黄灰色を呈す。	暗灰色	70%
	⑩ 3.1	⑭ —			
19	⑨ 18.8	⑬ 4.8	ボタン状つまみ。天井部から体部は丸みもち、回転ヘラケズリは天井部の1周のみ。返りなし。焼成良好。	灰色、断面中央部灰色	40%
	⑩ (4.7)	⑭ —			
20	⑨ —	⑬ (4.2)	ボタン状つまみ。天井部から体部はなだらかな丸みをもつ。外面は体部中程まで回転ヘラケズリ。焼成良好。	白灰色	50%
	⑩ —	⑭ —			
21	⑨ 16.4	⑬ (4.4)	ボタン状つまみ。天井部から体部はなだらかな丸みもち、口縁は返りなし。外面は体部中程まで回転ヘラケズリ。	灰色、断面は黄灰色	40%
	⑩ (3.8)	⑭ —			
22	⑨ 16.0	⑬ —	扁平な体部から返りのない口縁部。屈曲部上面に細い回転ヘラケズリを有す。体部外面は割断しており、焼成は良好とはいえない。	灰色	30%
	⑩ —	⑭ —			
23	⑨ 20.4	⑬ —	大型扁平な蓋で返りなし。天井部から体部回転ヘラケズリ。焼成は軟質で不良。	白灰色	30%
	⑩ —	⑭ —			
24	⑨ 17.0	⑬ 3.2	ボタン状つまみ。天井部はやや厚が上がり、口縁は返りなし。天井部回転ヘラケズリ。焼成軟質で天井部内面の側面にはスズ状混入物の焼成痕あり。	白灰色	60%
	⑩ (3.7)	⑭ —			
25	⑨ 14.8	⑬ (4.2)	ボタン状つまみ。天井部から体部にかけて回転ヘラケズリで丸みをもつ返りのない口縁に至る。焼成不良。	白灰色	60%
	⑩ (3.4)	⑭ —			
26	⑨ 18.0	⑬ —	返りのないやや大型の蓋。天井部から体部にかけて回転ヘラケズリ。天井部には深い沈線が3本走るが砂粒痕であろうか。焼成良好。	灰色	30%
	⑩ —	⑭ —			
27	⑨ 15.4	⑬ —	全体に丸みもち、口縁外面は長く屈曲する。返りなし。天井部から体部にかけて回転ヘラケズリ。口縁外面は重む焼成で暗灰色。焼成良好。	茶灰色	40%
	⑩ —	⑭ —			
28	⑨ 14.8	⑬ —	水平な体部の厚く扁平な蓋。返りなし。表面は黒色炭物の細かな発泡が全体にみられる。焼成良好。	灰色、断面は赤褐色	20%
	⑩ —	⑭ —			
29	⑨ 20.0	⑬ —	扁平な大蓋蓋で返りなし。天井部を回転ヘラケズリ。厚さは均一である。焼成良好。外面は僅かに黄炭物が付着し黄色がかかる。	灰色	40%
	⑩ —	⑭ —			
30	⑨ 18.2	⑬ —	全体に丸みもち、返りのない口縁は屈曲して内転する。天井部回転ヘラケズリ。口縁外面部厚層で少々黒灰色。焼成不良。	白灰色	30%
	⑩ —	⑭ —			
31	⑨ 18.0	⑬ 5.0	ボタン状つまみで返りなし。天井部から体部にかけて回転ヘラケズリ。酸化焼成済みであり、口縁外面から体部内面にかけては重む焼成のため黒灰色。	暗褐色	30%
	⑩ (3.2)	⑭ —			
32	⑨ 15.0	⑬ 5.3	ボタン状つまみ。全体に厚手で丸みをもつ返りのつく口縁に至る。天井部から体部にかけて回転ヘラケズリで外面口縁部の自然輪に黒い粘土が付着。	灰色	宛形
	⑩ 3.4	⑭ —			

表12 須惠蕨観察表 (3)

⑥口縁 ⑦つまみ径 ⑧断面 ⑨農人径

No	法	量	形 態・手 法・渡 成・絶	色 調	残存
33	④ 16.0	⑤ —	返り状の僅かな段を口縁内面上位に有す。内面には径10mm部の葉巻紋があり、板に沿って厚薄個体の粒状の付着あり。外縁は暗灰色の自然縁。焼成良好。	暗灰色	80%
	⑥ —	⑦ —			
34	④ 18.0	⑤ 7.6	扁平で径の大きなボタン状つまみ。全体に丸く深みがあり、口縁内面上位に返りを有す。大井部回転ヘラケズリ。焼成良好。	灰 色	80%
	⑥ 3.4	⑦ —			
35	④ (17.0)	⑤ 5.8	ボタン状つまみ。全体に扁平で小さな返りを有す。天井部から体部下位まで回転ヘラケズリ。焼成良好。	灰 色	30%
	⑥ (2.3)	⑦ —			
36	④ 16.2	⑤ 5.9	ボタン状つまみ。全体に扁平で橋面三角形の鋭い返りを有す。天井部から体部下位まで回転ヘラケズリ。つまみ以外の外面は陶灰釉で黄色がかかる。焼成良好。	灰 色	90%
	⑥ 2.5	⑦ —			
37	④ 18.0	⑤ 5.9	ボタン状つまみ。天井部は回転ヘラケズリで種かな丸みをもち口縁内面に断面三角形の返りを有す。外歪外側に黄灰色の陶灰釉が付着。焼成良好。	灰 色	90%
	⑥ 2.7	⑦ —			
38	④ 15.6	⑤ (5.6)	ボタン状つまみ。返りは小さく口縁内面上位にある。天井部から体部にかけて回転ヘラケズリ。外面全体に陶灰釉が付着。焼成良好。	暗灰色	50%
	⑥ (2.7)	⑦ —			
39	④ (15.4)	⑤ —	天井部から体部は厚手で回転ヘラケズリを施す。口縁には返りを有す。外側全体は陶灰釉のため黄灰色を呈す。焼成良好。	暗灰色、断面は赤灰色	30%
	⑥ —	⑦ —			
40	④ 16.2	⑤ 3.6	宝珠形つまみ。平均的な丸みをおび、口縁内面上位に返りを有す。外面の隅四角は自然縁のため暗灰色。焼成良好。	青灰色	60%
	⑥ 4.8	⑦ —			

表13 須惠蕨観察表

⑥口縁 ⑦直径 ⑧断面 ⑨農人径

No	法	量	形 態・手 法・渡 成・絶	色 調	残存
1	④ (27.0)	⑤ —	胴部やや張り口縁大きく外縁。体部外面細かな平行叩きで内面青濁紋文あて目。その後部分的に回転ナデ。	暗灰色	60%
	⑥ 40.6	⑦ 39.0			
2	④ 25.5	⑤ —	体部中位やや上に最大径をとる。体部外面細かな平行叩きで内面青濁紋文あて目。その後胴部内外面回転ナデ。焼成時の肉み及びヒビ割れあり。	灰 色	70%
	⑥ 41.8	⑦ 41.0			
3	④ 27.0	⑤ —	法量No1とはほぼ同じだがややずんぐりする。体部外面平行叩き目が深く残り下半は交差する。内面は放射状あて目。焼成不良で器面割れ多い。	灰色、断面は赤灰色	60%
	⑥ —	⑦ 39.0			
4	④ —	⑤ —	比較的厚手。外面板方向の細かな平行叩き。内面は下位青濁紋文、上位無文のあて目で口縁面下は扁平平行叩きを回転ナデが消す。焼成良好。	白灰色	30%
	⑥ —	⑦ (30.6)			
5	④ (30.4)	⑤ —	口縁内外面回転ナデ。内面に窯底の落着物あり。口縁写四片。焼成良好。	灰 色	10%
	⑥ —	⑦ —			
6	④ (25.0)	⑤ —	口縁内外面回転ナデで胴部内面青濁紋文あて目。口縁写四片。焼成良好。	灰色、断面は黄灰色	10%
	⑥ —	⑦ —			
7	④ (19.0)	⑤ —	大きく外反する厚手の口縁で胴部まで内外面回転ナデ。口縁内面と胴部外面は陶灰釉が付着。口縁から胴部写四片。焼成良好。	灰 色	10%
	⑥ —	⑦ —			
8	④ 24.0	⑤ —	口縁面は深いナゲでシャープ。口縁内外面回転ナデ。胴部は外面平行叩きで内面は青濁紋文あて目の上部を口縁の回転ナゲが消す。口縁写四片。焼成良好。	灰 色	10%
	⑥ —	⑦ —			
9	④ —	⑤ —	胴部から体部上位は外面に縦方向平行叩きで内面青濁紋文あて目。外面陶灰釉が付着。胴部から体部写四片。焼成良好。	灰 色	10%
	⑥ —	⑦ —			
10	④ (52.4)	⑤ —	超大型口縁写四片。口縁縁部に段状の隆起をもち直下の口縁上下に沈線区画を伴う帯輪紋文が2列通る。焼成良好。	暗灰色	10%
	⑥ —	⑦ —			
11	④ 16.0	⑤ —	小ぶりの壺。外面平行叩き目で内面は青濁紋文あて目。外面胴部以上と内面上半は叩き後に回転ナゲ。焼成良好。	灰 色	60%
	⑥ (21.6)	⑦ 24.2			
12	④ (14.0)	⑤ —	やや肩の重なる小型壺。胴部から体部下位まできり目調整で以下は回転ヘラケズリ。内面回転ナゲで一部手持ちナゲ。表面は若干割れるが焼成良好。	灰色、断面は赤灰色	50%
	⑥ (14.0)	⑦ 17.6			

表14 須恵大型密観察表

④口径 ⑤底径 ⑥器高 ⑦最大径

No	法 量	形 態・手 法・焼 成・焼	色 調	残存
1	④ 16.4 ⑤ 15.8 ⑥ 36.8 ⑦ 29.2	胴部に把手をもつ付置。全体に不整形で底部から体部にヒビ割れが入る。内外面回転ナデで叩きの痕跡はない。自然釉、降伏層付着。焼成不良。	灰 色	60%
2	④ 17.7 ⑤ 16.8 ⑥ — ⑦ 32.5	胴部ならから口縁部立気味に外反。体部は叩き彫形で外面は行叩き、内面無気味で目。口縁接合部内面指押え。体部下端回転ナデ。焼成良好。	灰 色	60%
3	④ 24.2 ⑤ — ⑥ — ⑦ 39.5	全体に大身の大型壺で体部下半はややこける。口縁内外面回転ナデで体部は外面平行叩き、内面は青海波文あて目。外面部分的に回転ナデ。焼成不良。	白灰色	50%
4	④ — ⑤ 17.0 ⑥ — ⑦ 41.0	形跡、手法共にNo3とほぼ同じ。平底の底部は内面回転ナデで体部下端は回転ナデ。外面は全体に不転下持ちナゲ。焼成良好。	白灰色	30%

表15 土師杯観察表

④口径 ⑤底径 ⑥器高 ⑦最大径

No	法 量	形 態・手 法・焼 成・焼	色 調	残存
1	④ 12.0 ⑤ 9.0 ⑥ 3.4 ⑦ —	持手丸底杯で口縁は内凹気味に立ち上がる。口縁外面から内面全体横ナデ。体部外面指押えで底部は手持ちヘラケズリ。焼成良好。	褐色色	60%
2	④ 12.5 ⑤ — ⑥ 3.3 ⑦ —	持手で底部は平底に近い丸底。全体に摩耗が激しいが口縁横ナデ、体部指押え、底部は手持ちヘラケズリと思われる。焼成は軟質で不良。	褐色色	60%
3	④ 13.3 ⑤ (9.2) ⑥ — ⑦ —	持手丸底杯。口縁外面から内面全体横ナデ。外面は体部指押え、底部手持ちヘラケズリ。焼成良好。	褐色色	20%
4	④ 14.0 ⑤ — ⑥ — ⑦ —	持手で底部は平底気味の丸底と思われる。口縁外面から内面全体横ナデ。体部は指押え、底部手持ちヘラケズリ。焼成良好。	褐色色	10%
5	④ 13.3 ⑤ 10.7 ⑥ 3.4 ⑦ —	持手丸底杯。手持ちヘラケズリの底部は指押えの体部と区画される。口縁外面から内面全体横ナデ。焼成良好。底部外面に墨点「下」。	褐色色	70%
6	④ 12.4 ⑤ 5.7 ⑥ 3.6 ⑦ —	全体に厚手で左右不均質な平底杯。口縁内外面横ナデ後、外面は体部に斜め手持ちヘラケズリ。底部は粗い。内面は体部放射状、底部不転下せん状地文。	褐色色	劣形
7	④ 12.9 ⑤ 8.5 ⑥ 3.8 ⑦ —	全体に厚手で丸みをもつ平底杯。摩耗激しく、口縁下端の深い横ナデ以外は不明確。焼成不良。	褐色色	50%
8	④ 11.2 ⑤ 7.5 ⑥ 4.0 ⑦ —	非常に厚い丸みをもつ平底杯。全体に摩耗激しく陶質不明確。焼成良好。	褐色色	60%
9	④ 28.0 ⑤ — ⑥ — ⑦ —	大型の高杯片と思われる。口縁部横ナデで体部は斜め手持ちヘラケズリ。焼成良好。	褐色色	10%

1

表16 土師壺観察表

④口径 ⑤底径 ⑥器高 ⑦最大径

No	法 量	形 態・手 法・焼 成・焼	色 調	残存
1	④ 18.7 ⑤ — ⑥ — ⑦ —	ややコの字状を呈す口縁片で口縁部外面はナデで面が取られる。内外面横ナデで部分的に指押え。焼成良好。	褐色色	10%
2	④ 23.0 ⑤ — ⑥ — ⑦ —	厚手の口縁が失くす外反する球脚壺と思われる。外面指押えで体部は斜めヘラケズリ。焼成良好。	赤褐色	小片
3	④ 18.0 ⑤ — ⑥ — ⑦ —	球脚壺と思われる。口縁は直立している。焼成良好。	褐色色	小片
4	④ 13.6 ⑤ — ⑥ — ⑦ —	小型壺口縁片。口縁はきぼどくびれずに鋭く外反する。内外面横ナデ。道下は横ヘラケズリ。焼成良好。	褐色色	10%
5	④ 13.0 ⑤ — ⑥ — ⑦ —	口縁が大きく外反する小脚壺。全体に摩耗激しい。焼成不良。	赤褐色	小片
6	④ — ⑤ — ⑥ — ⑦ —	S字状口縁付変新下位片。外面横ヘラケズリ後、斜め斜下で内面ナゲ。	褐色色	小片

表17 B区ビット出土遺物観察表

No	法 量	形 態・手 法・焼 成・他	色 澤	残存
1	㊸ — ㊹ — ㊺ — ㊻ —	須恵大型甕口縁片，太い隆帯下に横帯状文をもつ。焼成良好。	灰色	小片
2	㊼ — ㊽ — ㊾ — ㊿ —	須恵長頸蓋肩部片と思われる。内側に一条、外側に平行沈線が2通り内部に横目刺突文を伴う。焼成良好。	灰色	小片



B区溝部付近遺物出土状況（東より）

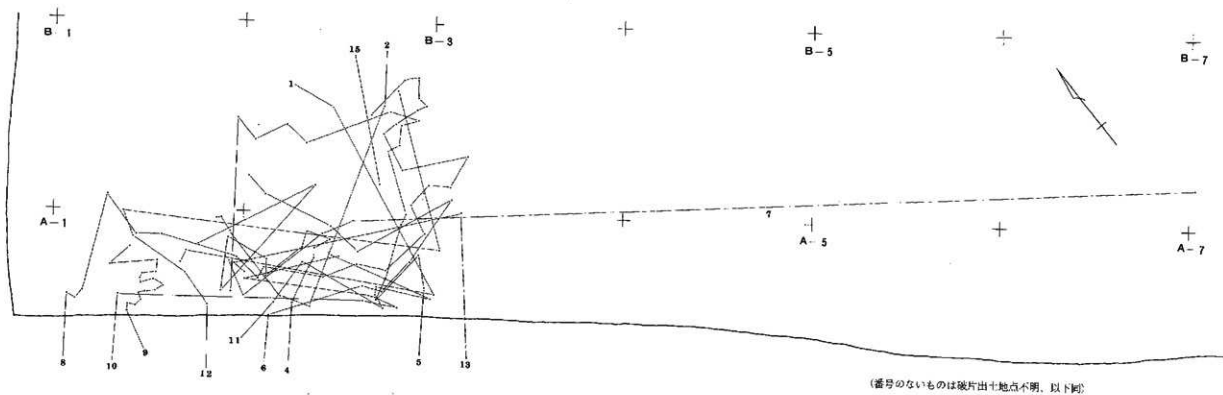


図27 須恵短頸蓋接合図 (1:40)

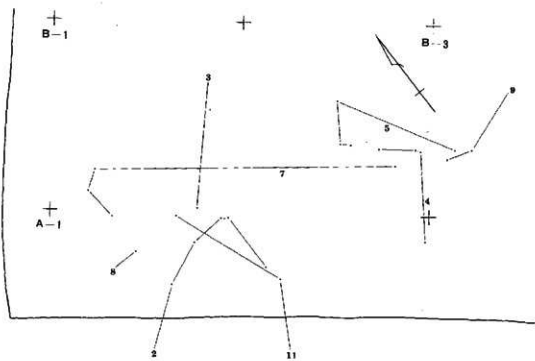


図28 須恵短頸蓋接合図 (1:40)

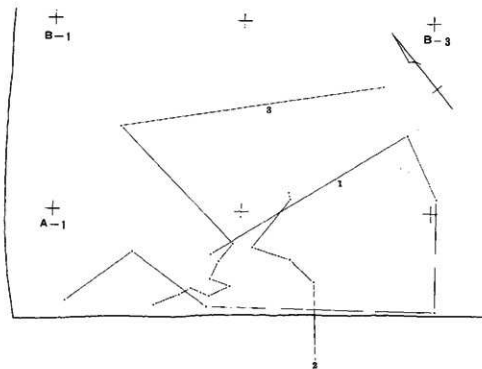


図29 須恵広口蓋接合図 (1:40)

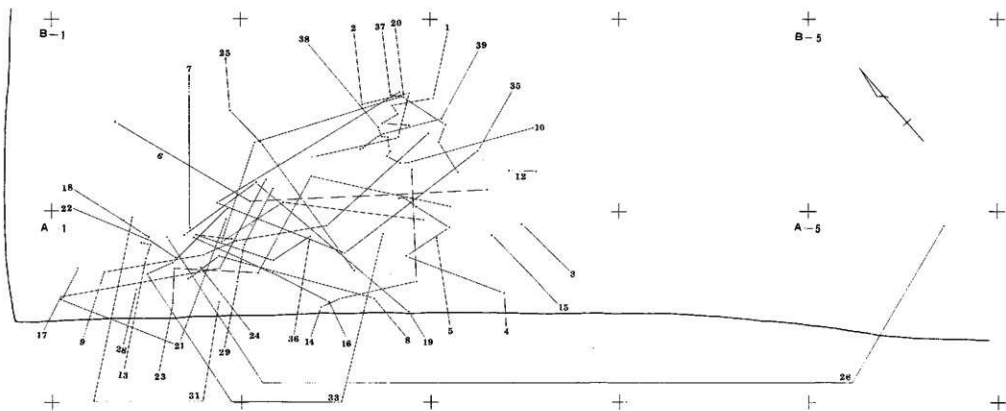


图30 须惠蓋接合図 (1:40)

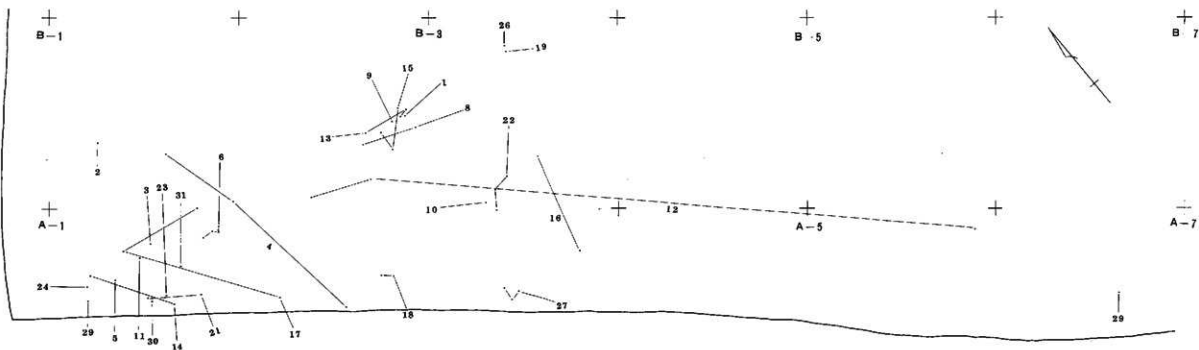


图31 须惠环接合図 (1:40)

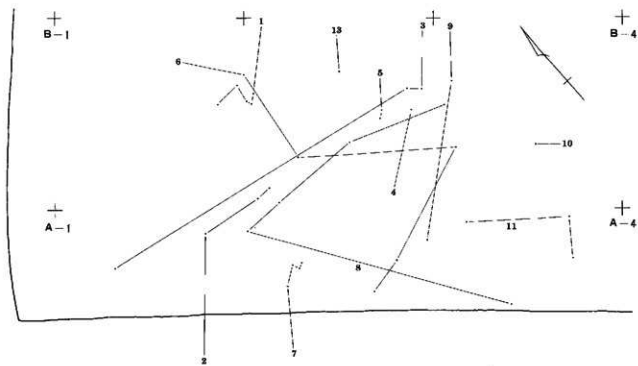


图32 須惠地接合図 (1:40)

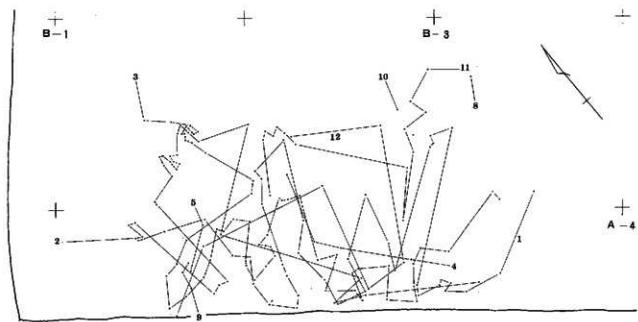


图33 須惠地接合図 (1:40)

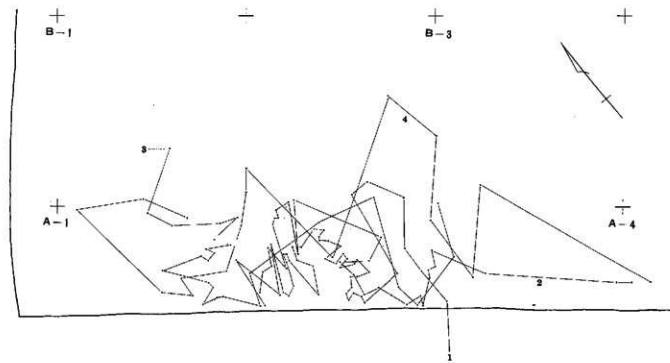


图34 須惠大型地接合図 (1:40)

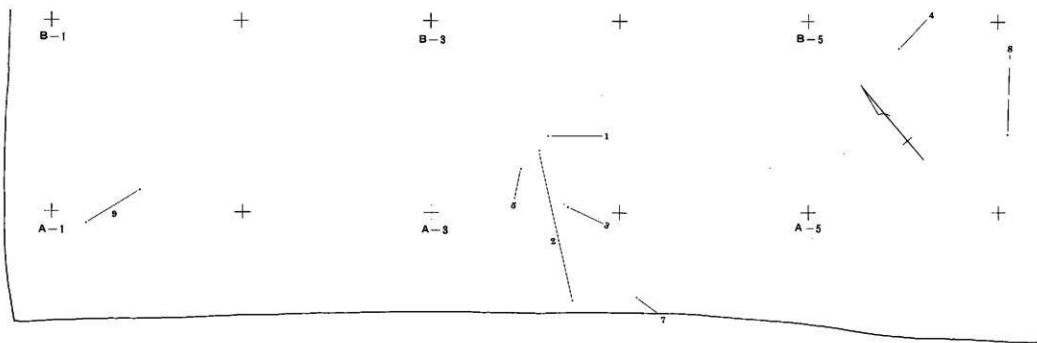


图35 土脚环接合图 (1:40)

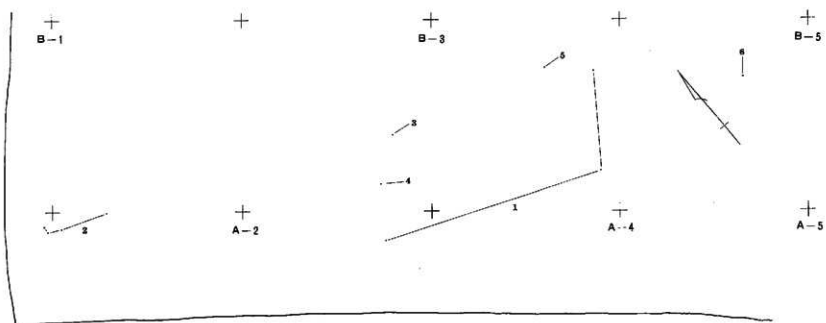


图36 土脚壁接合图 (1:40)

< C区 >

調査区西端部に位置する。本区では東側部分より竪穴住居跡が2軒検出された。これらは重複関係にあり、西側を1号住居跡、東側を2号住居跡と命名し、新旧関係は2号→1号であった。現地表は僅かに南東への傾斜をなすかはほとんど平坦とも言える。遺構確認は地表より40cm～50cm下の上部ローム面で行ない、壁上部は地表から浅いために残存していなかった。また、1号住居跡の東壁ラインは擾乱により切られていた。1号、2号ともに南壁は調査区外であるので規模や形状は確認し得ない。尚、本区では他に遺構は確認されなかった。

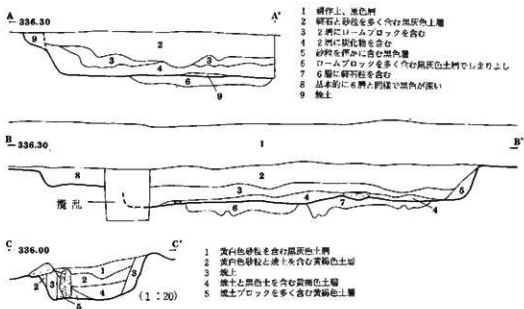
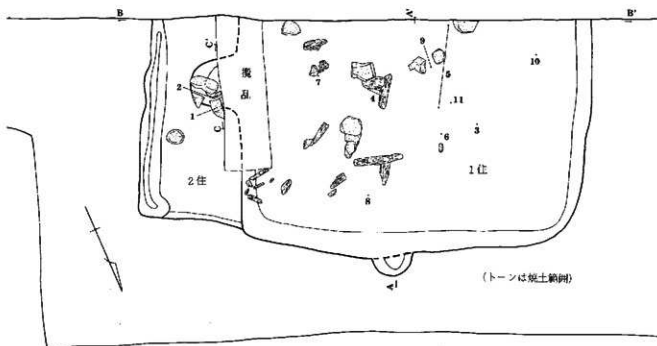


図37 C区1号・2号住居跡 (1:40)

1号住居跡

- 主軸方位** S-65°-E
- 形状** 調査区外に延びるため不明。残存する北壁~南壁は比較的整っておりコーナーは緩やかな隅丸。
- 規模** 北壁際で3.5m、調査区際で3.75m（推定）、南北は中央で2.45mが残存する。確認面から床面までは平均して40cm~45cmであった。
- 重複** 2号住居跡より後出する。東壁部は後世の攪乱が切り込んでいる。
- カマド** 東壁部。僅かに残る住居北東コーナーの位置より壁から張り出して付設されていると判断し、残存する張り出しは壁より50cm（推定）、幅50cmの長半円形を呈している。火床面は比較的平坦で向壁と共に赤灰色によく焼けて脆弱化する。内部及びカマド付近からは石組み材としての石が数個出土しているが原位置を留めてはいない。覆土は第1層以外の全てに焼土が含まれ、特に西側壁際は焼土純層となっている。攪乱のために焚口や袖部の状況は不明。
- 覆土** 7層に分層出来る。このうち第6層と第7層は貼床用の埴土、第5層は第1次崩落層と思われる。また部分的に床面直上には焼土集中部（スクリーントーン部分）が検出されており、同レベルでは炭化物と共に炭化材が検出されている。
- 床面** 住居南東部及び南西部は不安定な泥り方面に貼り床を確認した。埴土は第6層と第7層である。住居掘削時の沸土と思われ、第6層に混入するロームブロックはローム層中、第7層の軽石はそれより上層の黒色土中に混入していたものと考えられる。また、貼床以外の部分は地山のローム面が使用されていた。共によくしまっており覆土との区別は比較的容易であった。
- 壁面** 全体的に緩やかな立ち上がりであった。
- 柱穴** 検出されない。
- 貯蔵穴** 検出されない。
- 周溝** 検出されない。
- 遺物** 1号住居プラン内で百余片の土器と共に鉄塊、石、炭化材を検出した。これらのうち、主として床面付近及びカマド部分の遺物を本住居に伴うものと判断し図化した。土器は土師甕片、須恵坏片、埴片、葺片、甕片が図38に示してある。鉄塊は50gと180gの2点で製品ではない。石と炭化材は床面直上及び第4層中より検出された。ある程度のまとまりをもって材木状に選存するものを炭化材とし、他は炭化物として覆土に含めた。
- 備考** 床面直上の炭化材、焼土部分等より焼失家屋としての可能性が考えられる。時期は伴出遺物より9世紀後半と思われる。

2号住居跡

- 主軸方位** N-25°-E（推定）
- 形状** 不明。
- 規模** 確認面から床面まで約15cm。平面規模不明。
- 重複** 1号住居跡に先行する。
- カマド** 1号住居跡に切り込まれた状態で北壁部に検出された。東壁よりカマド中央までは2.7mを計り、それ以西の本住居プランが1号に切られるために北壁ライン上での位置（寄り）は不明。残存する半円状張り出し部では幅45cmを計る。火床面及び西側壁は赤灰色によく焼けている。石組みの痕跡は無く、覆土は焼土層のみであった。
- 覆土** 住居部分の第8層とカマド内埴土の第9層を確認した。

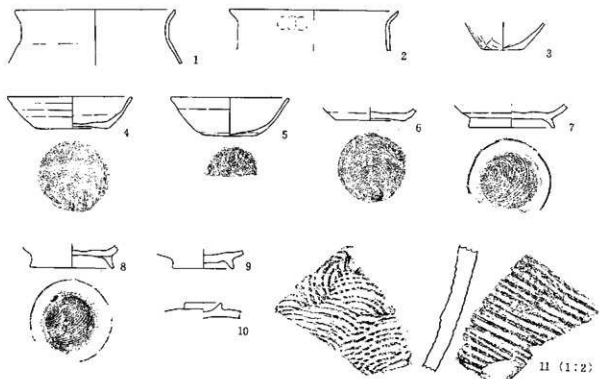


図38 C区1号住居跡出土遺物

表18 C区1号住居跡出土遺物観察表

◎口縁 ⑤底縁 (10はつまみ柄) ③器口 ④最大径

No.	器種	法	量	形 態・手 法・焼 成・地	色 調	残 存
1	土師甕	◎ (17.0) ⑤ —	—	コの字状口縁を呈す筒手の甕。口縁外面は深い横ナデが入り肩部は横ヘラケズリ。摩耗が進んでいる。	褐色色	小片
2	土師甕	◎ (18.0) ⑤ —	—	コの字状口縁を呈す筒手の甕。口縁外面は深い横ナデの後に指頭状痕が見られ、下半には肩部横ヘラケズリの端が一部に及ぶ。焼成良好。	褐色色	小片
3	土師甕	◎ — ⑤ (4.3)	—	筒手の甕底部分。外面縦一斜めヘラケズリで内面はきめ細かな仕上げ。№1か2の底部と思われる。焼成良好。	暗褐色	小片
4	須恵環	◎ 13.2 ⑤ 7.6	—	扁かな器りをもって口縁まで開く。器面は比較的滑らかでよく焼きまわっている。底部は回転承切り無調整。	灰色	70%
5	須恵環	◎ (12.6) ⑤ (6.0)	—	体部は裏りをもち口縁で少々外反する。筒手で器面はザラつき、底部は切り差し失敗のために丹び粘土板を貼って回転承切りか。焼成不良。	灰色	30%
6	須恵環	◎ — ⑤ 7.5	—	底縁回転承切り無調整。焼成良好。	灰色	30%
7	須恵環	◎ — ⑤ 9.0	—	底縁回転承切り後内部貼り付け直転ナデ。焼成良好。	灰色	30%
8	須恵環	◎ — ⑤ 8.8	—	底縁回転承切り後内部貼り付け直転ナデ。焼成は軟質でもろい。	白灰色	30%
9	須恵環	◎ — ⑤ 6.4	—	台部貼り付けと思われるが全体に摩耗しており手法不明瞭。内面は黒色処理。完全酸化焼成。	褐色色	30%
10	須恵蓋	◎ — ⑤ (4.0)	—	ボタン状つまみ付近小片。焼成良好。	暗褐色	小片
11	須恵甕	◎ — ⑤ —	—	外面斜位平打き目、内面は青洲紋文がはっきりと残る。焼成良好。	灰色	小片

- 床 面 地山のローム面を床面としている。
- 柱 穴 検出されない。
- 貯 蔵 穴 検出されない。
- 周 溝 東壁に検出された。床面レベルで壁より内側に約20cmの幅をもち、床面からの深さは約7cmを計る。調査区際で徐々に立ち上がりを見せている。
- 遺 物 2号住居プラン内では土器小片数点と鉄塊3点、平石1点が検出された。土器は薄手の土師甕小片、鉄塊は各々55g、185g、200gを計り、製品ではない。
- 備 考 遺物が小片のため不明確ながら9世紀後半と考える。



C区住居跡遺物出土状況（北より）

(IV 検出された遺構と遺物) 2 北野牧孤董遺跡

〈A区〉

図2北側のトレンチ3箇所による調査区である。本区は本遺跡地の北端に位置し、これより北は遠人川までの急斜面が続く台地端部である。

2m×1mのトレンチは西より1、2、3とし掘り下げを行なったが、遺構とし得るものは検出されなかった。1トレンチの中心(地表より約30cm)黄褐色土中より石の出土をみたが遺物とは判断出来ない。遺物は3トレンチ下位より土師器の小片が検出されたが、器形、時期ともに不明である。

〈B区〉

本遺跡南側の緩斜面上にグリッドを設定した。2m×2mグリッドで2列に13箇所を北から南に向かって配し、ナンバーは東側、西側……と1～26まで命名した(図39)。このうち、掘削を行なったのは図39のスクリーントーン部分で示した部分である。トーンの強い部分はさらに掘り下げたことを示している。

この中で遺構および遺物が確認されたのは13、16、21、23各グリッドである。13、16、23グリッドでは縄文土器の小片が少量出土しており、これは地表下15cm～80cmの黄褐色土層中のものだが明確なレベルは確認していない。遺構は全く伴わず、土器の時期については縄文時代前期(器形不明)1、他は時期不明であった。

遺構としては21グリッドと22グリッドの境界部分で集石が検出されている。確認面(集石上部)は地表下約70cmの黄褐色土中で、さらに20cm弱下位より集石に伴う掘り込みプランが確認された。石は長さ10cm～20cm程の角をも

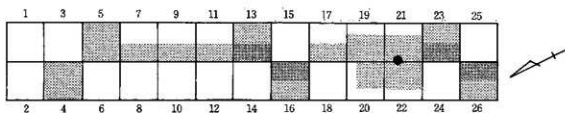


図39 B区グリッド配置図(1:200)

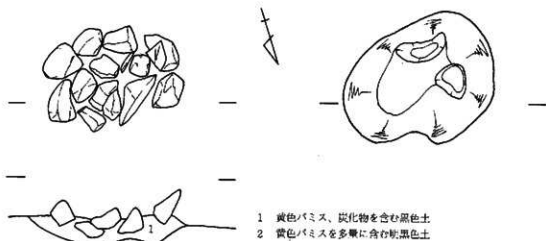


図40 21・22グリッド集石部(1:20)

つもので大小合わせて15個の集石部を形づくる(図40)。これらは径75cm×50cmの楕円状を呈し、ピット内に納まる。ピット覆土は黄色バミスと炭化物を含む黒色土1層のみであり、この下位から上位に石が入り込む状況であった。焼土は全く検出されていない。また、ピットの掘り方は80cm×60cmの不整楕円形で深さは中心部で約30cmを計った。底面の2箇所の小ピットは石の痕跡である。本遺構に遺物は全く伴わなかった。尚、図40断面図中の基準線は平面図の土層断面観察位置と水平を示しており、標高の数値は出していない。

さらに掘り下げた13、16、23、26各グリッドからは先述した土器以外、遺物、遺構共に検出されなかった。



B区集石部検出状況(21グリッド側)

V まとめ

本遺跡では平安期の穿穴住居跡2軒の他、遺構としては溝状遺構、ピット等性格付けの困難なものが少量検出されたのみである。また遺物では住居跡に伴うもの敷点、他地区での破片敷点の他に、B区より出土した大量の須恵器が主体をなしている。そこで本稿では百数十点に及ぶB区の遺物に着目し、これらの性格付けを試みることでまとめにかえることとする。

B区出土遺物を器種別に整理して以下に記す。これらはIV章でも述べたとおり小片数百点を除いたある程度復元可能なものである。また()は総数145点中に占める各器種点数の割合を示している。

- ・須恵短頸甕—16点 (11.0%)
- ・須恵短頸甕蓋—11点 (7.6%)
- ・須恵広口壺—3点 (2.1%)
- ・須恵杯—31点 (21.4%)
- ・須恵埴—13点 (9.0%)
- ・須恵壺—40点 (27.6%)
- ・須恵甕—12点 (8.3%)
- ・須恵人型甕—4点 (2.8%)
- ・土師杯—9点 (6.2%)
- ・土師甕—6点 (4.1%)

このデータより「須恵器の割合が非常に高い」、「須恵器の器種が多い」、「セットとなり得る器種が存在する」等が挙げられると思う。須恵器の割合は145点中130点で実に89.7%を占めている。本区では土師器が非常に少なかったため、特に土師甕などは須恵器では除外したような小片もとり上げて報告している。よって実際の須恵器の占有率はさらに高いことになる。また、器種については大型品(甕、壺)、中型品(短頸甕と蓋、広口壺、甕)、小型品(杯・埴と蓋)がそれぞれ検出されており、一か所からの出土としてはバラエティーに富むと言える。

さて、本区遺物の特徴として不良品と思われるものが多く見られる事をIV章で述べた。以下、その観察表を提示して注目してみたい。尚、ここでは「歪み」、「付着物」、「ヒビ」、「穴」、「剝離」などを留意点としている。

表19 五科山岸遺跡B区遺物不良品

(「割合」は各器種点数に占める不良品数の割合)

器種	No	内 容	割合	器種	No	内 容	割合		
短頸甕	11	口縁に大きい付着物(須恵壺1とセット)	9.1%	壺	1	つまみ部剝離	27.5%		
短頸甕	1	口縁一部部に大きい付着物	43.8%		6	つまみ部剝離			
	2	底一内部面にヒビ割れ			9	全体に少々歪み			
	5	底部内部剝離多い			10	全体に少々歪み			
	8	口縁外部面にすき割			15	犬井部ヘラケズリ跡で凹凸あり			
	9	底面内外面剝離多い			18	口縁の一部に歪み			
	11	口部外側に付着物			22	口縁以外の外面剝離			
杯	12	底部外側に大きい付着物	25.0%		24	底部内側大きく剝離		75.0%	
	1	底部外側の一部に粘土付着			32	外面全体に砂状付着物			
	6	底部内側の一部に粘土付着			33	底部内部に付着物と気泡状付着			
	7	底部外面の一部に粘土付着			40	かえりと口縁部間に気泡状付着			
	10	底部外側の2箇所を粘土付着			大型壺	1			底一内部ヒビ割れと底部面に粘土付着物
	12	底部外側全体に小粒、砂状付着物		2		底部薄く剝離状に欠割			
	15	底部外側に径5cmの輪状粘土付着		4		外面剝離多い			
	19	底部中央が円状に欠割		壺		1	口縁一部外側全体に付着物		
	25	全体に歪み大きい				2	底部下位一中央ヒビ割れ		
29	口縁に少々歪み	3	底部下位内外面剝離多く全体的に歪み						
埴	2	底部に×3mmの疵人物穴(貫通)	23.1%	7	口縁の一部に歪み				
	7	全体に少々歪み、或所部にヒビ							
	12	底部中央に約10mmの小石が露出							

以上は筆者の主観によって抽出したものであり、例えば多少の歪みのあるものを「不良品」とするかどうかは観察者によって違ってくると思われる。仮に全ての器種に液体を入れるとすれば短頸甕2、杯19、25、埴2、大型壺1、壺2などはその機能を果たせないが固体ではそれほど問題ではないであろうし、付着物や小孔などにしても機

能的にみれば不良と言えないものも多いであろう。これは遺物を「機能」か「製品一何らかの形で供給されるもの」か、とする見方の相異によるものであり、ここでは基本的に後者の立場でとらえている。ちなみに本区出土須恵器130点中38点が不良品とされたものであり、割合は29.2%であった。

これらの遺物が不良品となった直接的な原因は大半が焼成時によるものと思われる。付着物、ヒビ、歪み等は焼成時以外には考えられない事であり、例えば窯入れ以前にヒビの入ったものを焼成するとは考えにくい。また、剥離は焼成中のものと共に、焼成後、そう時間が経たないうちに焼成不良のために生じたものと思われ、これは表面と剝離面とで色調が異なることからとも言えるのではないだろうか。

その他に気付いたB区遺物の特徴としては、「明確な遺構に伴っていない」「一か所から大量に検出されている」「遺物間での時期差が小さい」という事である。遺物集中部が溝内部を中心に広がっていないということは、必ずしも遺物がそれに伴うものではないとも言える。また、これだけの破片が集中するのは、そこに何らかの意図があったのではないだろうか。さらに、出土した須恵器は形態や整形技法から瀬内奈良時代の所産と考えられるが、遺物間に明確な層位が存在せずに、むしろ遺物自体が層の主体をなしている状況を見ると、ある一定期間、さほど間を置かずにこれらの遺物が積み重なっていった可能性が高い。土器片相互の間に黒色土が入り込んでいることについては、これらが一度に現れたのではなく、徐々に増えてゆく過程で土も堆積していったと考えられる。

これまで述べた事をまとめて以下に記す。

- ①出土遺物は殆んどが須恵器である。
- ②須恵器の器種は多く、セットとなる器種もある。
- ③須恵器中には不良品とみられるものがその3割を占め、大半は焼成時によると思われる。
- ④性格の明確な遺構には伴わない。
- ⑤一か所からの大量な出土である。
- ⑥遺物間の時期差が小さく、一定期間のうちに徐々に遺物が増加した。

さて、以上の事項より、遺物集中部について土器（須恵器）の廃棄場所であるという可能性を考えてみたい。廃棄される須恵器が不良品（失敗作）であり、器種も数種類が存在することは充分考えられる。また、一か所に集中し、徐々に増えていったのも廃棄の性格を肯定している。さらに、以上の事より須恵器焼成用の窯の存在が考えられるところであるが、本遺跡付近での窯跡確認例はない。ただ、遺跡の立地をみると、松井田丘陵南麓の緩斜面であり北方100mには丘陵の急峻な傾斜が近という、地形的には窯の存在が考えられる場所ではある。しかし原料となる良質な粘土が採取されるのかどうかは調査例に乏しく不明と言わざるを得ない。

また、廃棄場所と考えた場合の矛盾点は窯跡以外にも考えられる。その一つは遺物の全てが不良品ではない点にある。リストアップした38点以外の須恵器の全てが完形というわけではないので、この中には不良品が存在するかもしれないが、そうではない（全てが良好なもの）とするとこれらが廃棄される理由は何なのか。また④については遺物集中部のズレがある。溝状遺構の性格はともかく、その時期は遺物に先行もしくは併行と考えてよいだろう。この凹みを利用（または廃棄用に凹めて）したとすれば放り込まれた遺物はその中央（底面）に集中すると思われるのだが、先述のように分布は溝底面から西壁にかけてであり、この点も廃棄とするにはやや難があるように思う。

このように、本遺跡B区遺物が廃棄されたものの集積という可能性が考えられる一方で矛盾する要素も含んでおり、性格付けを断定出来るものではない。先に挙げた以外にも、少量だが検出されている土師器類の問題、中でも古式土師器であるS字状口縁台付甕片の検出はその分布域を広げたと同時に集落や生産遺構の存在も考えてゆかねばならない。また、北方丘陵をそのコースとされている古代東山道との関連性も指摘されよう。今回の調査結果は、その立地や階層等を考慮してみても多くの問題を提起した。これらは基礎資料として大きな意義をもつと共に、関連する資料の増加によってさらに活用され得るものとなる。

(附編) 五料山岸遺跡出土須恵器の胎土分析

第四紀地質研究所 井上 謙

はじめに

県内に於ける十器胎土分析の試みはかなり一般化しつつあり、分析資料の蓄積が進んでいる。考古学に関連する自然科学的分析は多いが、通常遺跡から検出される遺物では土器が主体をなしており、その産地を厘定し得る資料を提供する胎土分析法の占める比重というものはやはり大きいと言えよう。

さて、五料山岸遺跡のB区では大量の須恵器が検出された。坏、碗、蓋、広口蓋、短頸蓋及び釜、大型壺、甕とその器種はバラエティーに富んでおり、时期的には8世紀代の所産と考えられる。これらの産地を同定するのが今回の分析の目的である。本遺跡は、その立地条件から窯址存在の可能性があると思われていた場所であり、またB区遺物中に不良品の山立つこと、遺物出土状況が廃棄的であること等より、遺跡地付近での生産及び生産品の廃棄が考えられた。このことを念頭に置いて分析を行なった訳であるが、ここで原土とした試料は、諸般の事情により本遺跡地の土壌ではない。本遺跡地より西方約1kmに所在する九科Ⅱ遺跡(仮称、5ページの図6参照)に於いてローム層下より採取したものであり、立地的に類似すると思われるので便宜上原土としたことを断わっておく。

分析試料は小型品(Na1、2、3)、中型品(Na4)、大型品(Na5、6)とし、大きさによる胎土傾向の有無を調べた。また、Na7は本遺跡より東方約3.4kmの匡街地内で検出された須恵坏片であり、本遺跡出土遺物と胎土のうえで差異があるかどうかを調べるために分析を行なった。(山口)

表1 胎土分析試料観察表

No.	器種	法 口	特 徴	時 期	残存	本編遺物地
1	須 恵 坏	㊦ (18.5)	体部は厚く唇みもちろ口縁部は薄手に外反する。表面に黒色炭物の染着が多く見られる。焼灰色。	8C前半	15%	掲載なし
2	須 恵 坏	㊦ 7.2	厚い底部より体部が高く外傾する。衣帯は帯ろからで筋目は赤灰色。底面紅赤切り無磨盤。焼成は硬質。	*	30%	*
3	須 恵 坏	㊦ (15.7) ㊦ (10.3) ㊦ 4.0	底部から体部下位にかけて肉転ヘラケズリ。微小な白色炭物を食み、これは3~6に共通する。	*	30%	*
4	須恵短頸蓋	㊦ (11.1) ㊦ 12.8 ㊦ 16.0	肩部に平行沈線が走り、内部は外面に接をもって通入する。底部から体部が半は肉転ヘラケズリ。	*	50%	須恵窯遺跡 No.7
5	須恵大型甕	㊦ 17.7 ㊦ (16.8)	胴部内面指押え。体部は外面に斜位の平行印き目、内面は黒文あて目が残る。体部下端肉転ヘラケズリ。	*	60%	須恵大型甕 No.2
6	須 恵 甕	㊦ 25.5 ㊦ 41.8	体部上半に最大径をとる人型甕。体部外面僅かな平行印き目で内面青褐色文あて目。加成時にヒビ割れ。	*	70%	須 恵 甕 No.2
7	須 恵 坏	㊦ (9.0)	体部下端肉転ヘラケズリ。局所炭物を多く含む。	*	15%	掲載なし
1	原土(上層)	褐色ローム層。バクついている。	五料Ⅱ遺跡(仮称)で採取。			
2	原土(下層)	黒色炭物を含む粘性ローム層。				

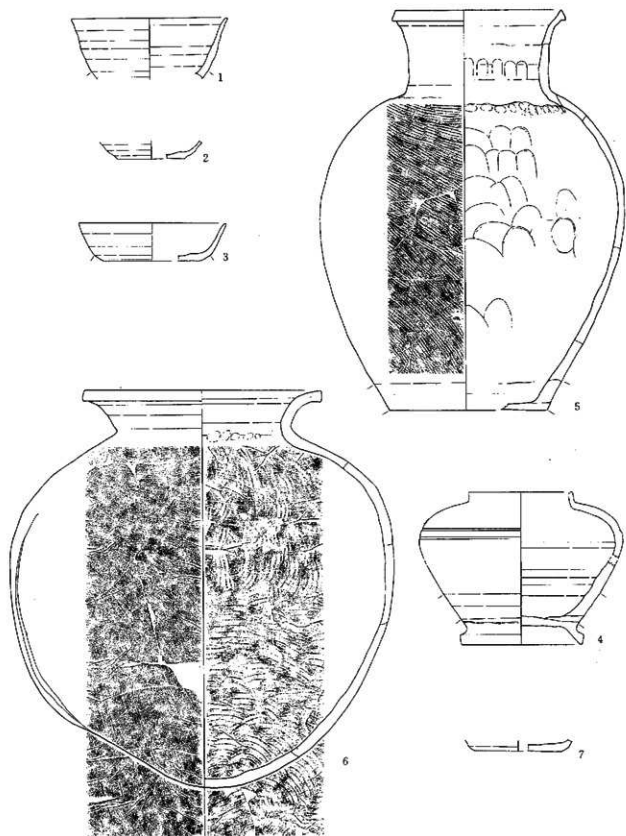


图1 胎土分析器物头测图(1:4)

1 X線回折試験及び電子顕微鏡観察

〈実験条件〉

実験条件—1 試料

分析に供した試料は表2胎土性状表に示すとおりである。

X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥した後にメノウ乳鉢にて粉砕し、粉末試料として実験に供した。

電子顕微鏡観察に供する遺物試料は断面を観察できるように整形し、 ϕ 10%の試料台上にシルバーペーストで固定し、イオンバッキング装置で定着した。

実験条件—2 X線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定には日本電子製JDX-8020 X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target: Cu, Filter: Ni, Voltage: 40Kv, Current: 30mA, ステップ角度: 0.02°, 計数時間: 0.5SEC

実験条件—3 電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物及びガラス生成の度合いについての観察は電子顕微鏡によって行なった。観察には日本電子製T-20を用い、倍率は35、350、750、1500、5000の5段階で行ない写真撮影をした。35-350倍は胎土の組織、750-5000倍は粘土鉱物及びガラスの生成状態を観察した。

〈実験結果の取扱い〉

実験結果は表2胎土性状表に示すとおりである。表2右側にはX線回折試験に基く粘土鉱物及び造岩鉱物の組成が示されており、左側には各胎土に対する分類を行なった結果を示してある。

X線回折試験結果に基く粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現れる各鉱物に特有のピークの高さ(強度)を%単位で測定したものである。

電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回折試験で得られたムライト(Mu)、クリストバーライト(Cr)等の組成上の割合とによって焼成ランクを決定した。

実験結果の取扱い—1 組成分類

(1) Mo-Mi-Hb三角ダイアグラム

図2に示すように三角ダイアグラムを1-13に分割し、位置分類を各胎土について行ない、各胎土の位置を数字で示した。Mo、Mi、Hbの3成分の含まれない胎土は記載不能として14に入れ、別に検討した。三角ダイアグラムはモンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)のX線回折試験におけるチャートのピーク高をパーセント(%)で表示する。モンモリロナイトは $Mo / (Mo + Mi + Hb) \times 100$ でパーセントとして求め、同様にMi、Hbも計算し、三角ダイアグラムに記載する。三角ダイアグラム内の1-4はMo、Mi、Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。位置分類についての基本原則は図2に示すとおりである。

(2) Mo-Ch、Mi-Hb菱型ダイアグラム

図3に示すように菱型ダイアグラムを1-19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。モンモリロナイト、雲母類、角閃石、緑泥石(Ch)のうち、a) 3成分以上含まれない、b) Mont、Chの2成分が含まれない、c) Mi、Hbの2成分が含まれない、の3例がある。菱型ダイアグラムはMont-Ch、Mica-Hbの組合せを表示するものである。Mont-Ch、Mica-HbのそれぞれのX線回折試験のチャートの高さを各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば $Mo / (Mo + Ch) \times 100$ と計算し、Mi、Hb、Chも各々同様に計算し記載する。菱型ダイアグラム内にある1-7はMo、Mi、Hb、Chの4成分を含み、各辺はMo、Mi、Hb、Chのうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。位置分類についての基本原則は図3に示すとおりである。

表2 胎土性状表

91. 秋井町町六科山岸産跡

原料 №	タイプ 分類	地質 ランク	組成分類		Mact	粘土等物および造岩鉱物										ガラス	備 考				
			Mo-Mi-Hb	Mo-Ch, Mi-Hb		Mica	Hb	Ca:Fe	Ca:Mg	Pyrite	Qtz	Pt	Cr	Ma							
原料-1	D	I	1.4	2.0						84	2636	69	517	80							粗粒の砂を混入する砂質性粘土
2	D	I-E	1.4	2.0						181	2570	74	100	96							中～粗粒 粗粒の砂を混入する砂質性粘土
3	D	I	1.4	2.0						706	2931	92	294	118							粗粒の砂を混入する砂質性粘土
4	D	II	1.4	2.0						193	4691	55	129	111							粗粒の砂を混入する砂質性粘土
5	D	I-E	1.4	2.0						181	3779	54	305	120							中～粗粒 粗粒の砂を混入する砂質性粘土
6	D	I	1.4	2.0						209	2756	80	430	194							粗粒 粗粒の砂を混入する砂質性粘土
7	A	I	5	2.0					75	108	2158	92	675	136							粗粒 粗粒の砂を混入する砂質性粘土
原料-1	B		8	5		270		213	100			681	1227								
2	C		8	2.0		118						456	1137								

焼成ランク Ha: I Ma-Cr: II Cr-glass: III glass: IV 添土: V

Mact: マンゴリロナイト Mica: 雲母類 Hb: 角閃石 Ca: 輝石 Py: 黄鉄鉱 Qtz: 石英 Pt: 斜長石 Cr: クリソトバライト Ma: ムライト

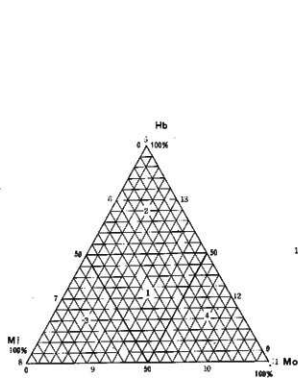


図2 三角ダイアグラム位置分類図

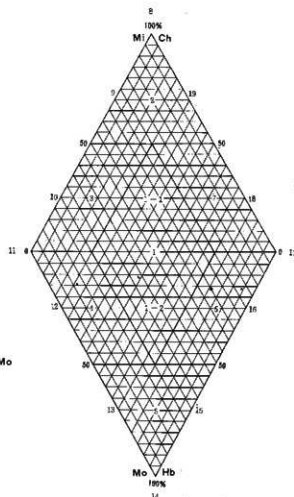


図3 菱型ダイアグラム位置分類図

実験結果の取扱い-2 焼成ランク

焼成ランクの区分はX線回折試験による鉱物組織と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行なった。

ムライト (Mullite) は炉器や陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストバーライト (Cristobalite) はムライトより低い温度、ガラスはクリストバーライトより更に低い温度で生成する。

これらの事実に基づき、X線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から土器胎土の焼成ランクをⅠ～Ⅴに区分した。

- 焼成ランクⅠ：ムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広く、ガラスは発泡している。
- 焼成ランクⅡ：ムライトとクリストバーライトが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。
- 焼成ランクⅢ：ガラスの中にクリストバーライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く、葉状断面をし、ガラスのつながりに欠ける。
- 焼成ランクⅣ：ガラスのみが生成し、原土 (素地土) の組織をかなり残す。ガラスは微小な葉状を呈する。
- 焼成ランクⅤ：原土に近い組織を有し、ガラスは殆どできていない。

以上のⅠ～Ⅴの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このためムライト、クリストバーライトなどの組合せと幾分異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については表2右側の備考に理由を記した。

実験結果の取扱い-3 タイプ分類

タイプ分類は各々の土器胎土の組成分析に基づくもので、三角ダイアグラム、菱形ダイアグラムの位置分類による組合せによって行なった。同じ組成を持った土器胎土は、位置分類の数字組合せも同じはずである。

タイプ分類は、三角ダイアグラムの位置分類における数字の小さいものの組合せから作られるもので、便宜上アルファベットの大字を使用し、同じ組合せのものは同じ文字を使用し表現した。例えば、三角ダイアグラムの1と菱形ダイアグラムの1の組合せはA、同じく2と15はBという具合にである。なお、タイプ分類のA、B、Cなどは便宜上つけたものであり、今後試料数の増加に伴って統一した分類名称を与える考えである。

〈実験結果〉

実験結果-1 タイプ分類

土器胎土は表2胎土性状表に示すように三角ダイアグラム、菱形ダイアグラムの位置分類、焼成ランクに基いてA～Dの4タイプに分類された。

表でも明らかなように分析は須恵器7点と原土2点について行なった。須恵器は全体に高温で焼かれているために、本来の鉱物が分解してガラス化が進み、タイプとしては殆どがDタイプとなっている。須恵器の中で異なる組成を示すものは料一7のサンプルで、このサンプルのみが国産地内出土の土器である。原土は本来の組成であるBとCタイプで構成される。

電子顕微鏡によるガラスの分析では、粗粒、中～粗粒のものが多く、焼成ランクはⅠあるいはⅠ～Ⅱと高い。

Aタイプ) 原土-1

～Mica、Chの2成分を含み、Mont、Hbの2成分に欠ける。

Bタイプ) 原土-2

～Mica 1成分を含み、Mont、Hb、Chの3成分に欠ける。

Cタイプ) 料一7 (国産)

～Hb 1成分を含み、Mont、Mica、Chの3成分に欠ける。

Dタイプ) 料一1、2、3、4、5、6

～Mont、Mica、Hb、Chの4成分に欠ける。高温で焼成されたために本来の鉱物は分解し、ガラスに変化しているためにDタイプとなったものである。

原土はMicaを含みHbを含まない。然るに五料一七（四衛）はHbを含んでおり、この点から判断して五料一七は五料山岸遺跡のものとは異なる。

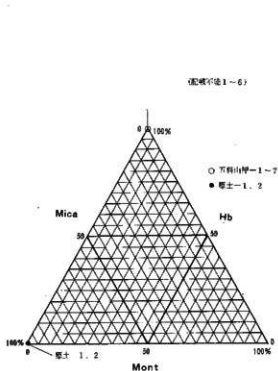


図4 Mo-Mi-Hb 三角ダイアグラム

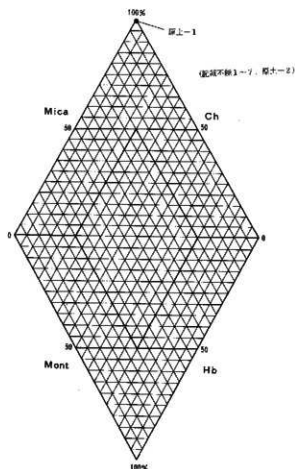


図5 Mo-Ch, Mi-Hb 菱形ダイアグラム

実験結果一 石英 (Qt) - 斜長石 (Pl) の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は、粘土の材質、土器の焼成程度と大きな関わりがある。土器を製作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは、個々の集団が持つ土器製作上の固有の技術であると考えられる。

自然状態における各地の砂は固々の石英と斜長石の比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば各地域における砂は各々固有の石英-斜長石比を有していると言える。この固有の比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するかは前記のように各々の集団の固有の技術の一端である。

図6 石英-斜長石相関図に示すように、土器と原土はI~IIグループと“その他”に分かれる。

Iグループ) 原土一、二

~石英の強度が低く、斜長石の強度が高いのが特徴である。原土のみで構成されるグループである。

IIグループ) 五料一、二、三、六

~個体数4個でいずれも五料山岸遺跡より出土した土器である。五料一は埴、二と三は坏で小型の土器が集中する。この中に五料一六の壺が含まれている。

“その他”) 五料-4、5、7

一五料-4は短頸壺で、石英の強度が高く異質である。五料-5は大壺で、石英の強度が幾分高い。この2個は五料山岸遺跡より出土したもので、Ⅱグループとは異なり、異なる集団で製作されたものであろう。五料-7は区衙地内出土土器で、タイプ分類でもHbが検出され、異質であり、ここでもⅡグループより離れているところから推察して、異なる集団で製作されたものではなかろうか。

以上の結果でも明らかなように、原土はⅠグループで、石英と斜長石の相関では土器とは明らかに異質であることがわかる。Ⅱグループは坏、埴などの小型の土器で構成されるのが特徴である。“その他”は3点で構成されるが、五料-4と五料-5は蓋だが著稱的に幾分異なっている。また、五料-7は区衙地内出土の坏で土質も異なる。たぶん異なる集団によって製作されたものであろう

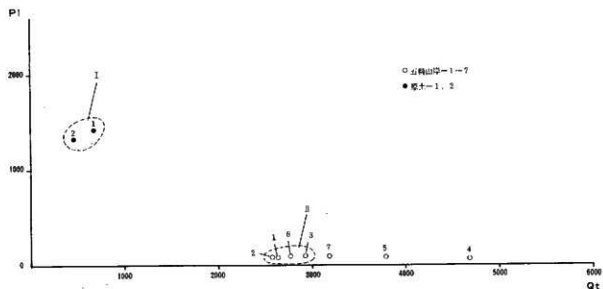


図6 Qt - Pl 相関図

表3 化学分析表

Oxide	五料-1(1)	五料-1(2)	五料-2(1)	五料-2(2)	原土-1	原土-2
	Wt %	Wt %	Wt %	Wt %	Wt %	Wt %
Na ₂ O		0.090		0.040		
MgO	1.140	1.190	1.190	1.440		
Al ₂ O ₃	16.450	17.190	12.640	15.080		
SiO ₂	71.750	69.780	66.700	71.010		
K ₂ O	1.530	1.370	1.870	2.480		
CaO	0.580	0.490	0.290	0.280		
TiO ₂	1.100	1.090	0.630	1.400		
MnO			0.130	0.080		
Fe ₂ O ₃	7.510	8.790	17.560	8.190		
CuO						
SnO ₂						
PbO						
Total	100.000	99.990	100.010	100.000	0.000	0.000

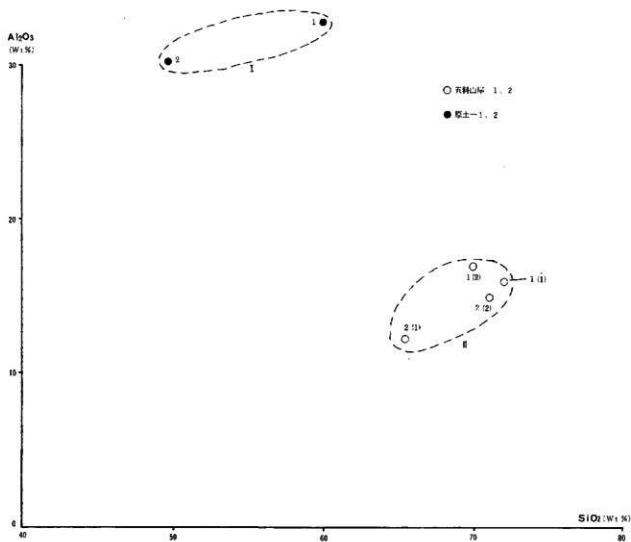


图7 SiO_2 - Al_2O_3 图

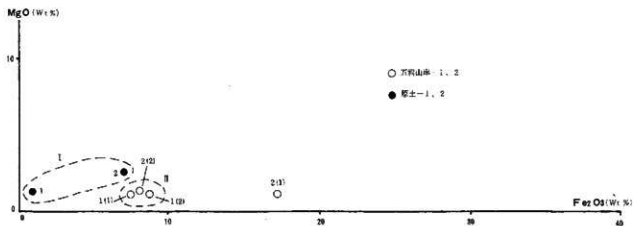


图8 Fe_2O_3 - MgO 图

II 化学分析

(分析条件及び分析結果)

化学分析は日本電子製 JED-2001 型エネルギー分散型 X 線分析装置によって行なった。実験条件は加速電圧が 15Kv、測定時間は 100 SEC、倍率×200 である。

分析結果を表 3 化学分析表に示すとおりである。表に示すように、土器の分析は石英と斜長石の相関における II グループの五料-1、2 について、それぞれ 2 箇所ずつ、また原土の分析は 2 点について各々 1 箇所ずつ行なった。これらの結果に基づき、図 7 SiO₂-Al₂O₃ 図、図 8 Fe₂O₃-MgO 区を作成した。

図 7 に示すように、I と II の 2 つのグループに分類された。

I グループ) 原土-1、2

-SiO₂ が 50~60%、Al₂O₃ が 30~35% の範囲にあり、原土のみで構成される。

II グループ) 五料-1、2

-SiO₂ は 65~75%、Al₂O₃ は 12~18% の範囲にあり、土器が集中するグループである。

図 8 においても、I と II の 2 つのグループに分類された。

I グループ) 原土-1、2

-Fe₂O₃ が 0~7%、MgO が 1~2% の範囲にあり、原土で構成される。明らかに II グループよりは MgO の値が高い。

II グループ) 五料-1、2

-Fe₂O₃ は 7~8%、MgO は 0~1% の範囲にあり、土器が集中する。

以上の結果より、原土と土器の化学組成は異なり、原土を直接使用して土器を製作しているとは考えにくい。

III まとめ

- (1) 土器は須恵器であり、焼成温度が高いために本来の鉱物は分解してガラスになっている。このため、タイプ分類では五料-1~6 は D タイプとなっている。しかし、同じ須恵器でありながら、陶術の土器である五料-7 は Hb を含む C タイプとなっており、他の土器とは異質である。原土-1 は A タイプ、原土-2 は B タイプである。この 2 点の原土は本来の組成であり、土器とは異なるのが当たり前である。原土の 2 点には Hb は含まれておらず、その点からすれば Hb を含む五料-7 は明らかに異質である。
- (2) 電子顕微鏡によるガラスの分析では、ガラスは粗粒、中-粗粒で焼成ランクは I あるいは I~II と高い。
- (3) 石英と斜長石の相関では、I~II の 2 つのグループと“その他”に分類された。I グループは原土で構成され、明らかに II グループとは異質である。II グループは丸、環などの小型の土器で構成される。“その他”に含まれる五料-4、5 は石英に強度が低く、明らかに異質であり、これらはそれぞれ異なる集団で製作されたのではなからうか。五料-7 もどのグループにも属せず、異質である。
- (4) 化学分析結果によれば、SiO₂-Al₂O₃、Fe₂O₃-MgO のそれぞれの関係において、土器と原土は異なるグループを作っており、直接原土を使用しているとは考えにくい。原土を何らかの方法で水銀などとして使用している可能性が考えられるが、このデータでははっきりしない。

写 真 图 版

五料山岸遺跡 図版 1～24

北野牧狐萱遺跡 図版 25～30



①区掘削状況 (西より)



②区、③区掘削状況 (西より)



④区掘削状況 (東より)



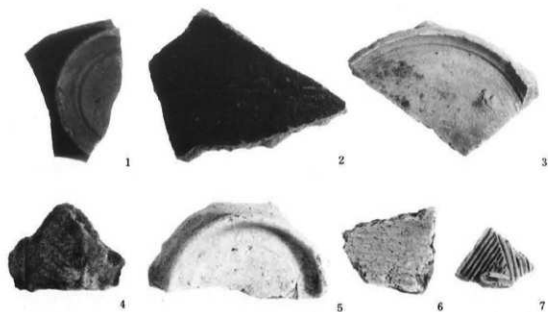
⑤区掘削状況 (東より)



⑥区掘削状況（東より）



⑦区掘削状況（東より）



その他の地区出土遺物（1・2・7-⑦区、他は不明）

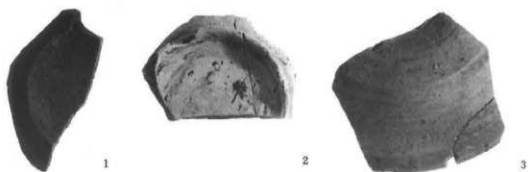


A区掘削風景（西より）



A区完掘状況（北より）

図版 4



A区出土遺物 (1~3)





B区掘削風景 (西より)



B区遺物出土状況 (東より)



B区溝部遺物出土狀況



B区短頸壺出土狀況



B区溝部遺物出土状況（東より）



B区 同上



B区溝部 石、遺物出土状況 (東より)



B区溝部完掘状況 (北より)



B区ピット断面



B区完掘状況 (東より)



▲B区 須恵短頸壺蓋 1~11

▼B区 須恵短頸壺 1~3





4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16

B区 須恵短頸壺 4~16



1



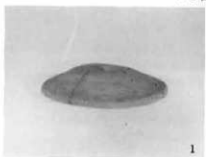
2



3

▲B区 須恵広口壺 1～3

▼B区 須恵蓋 1～12



1



2



3



4



5



6



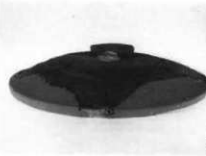
7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



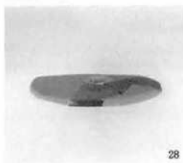
25



26



27



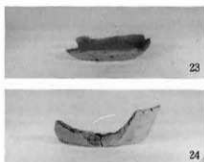
B区 須惠蓋28~40



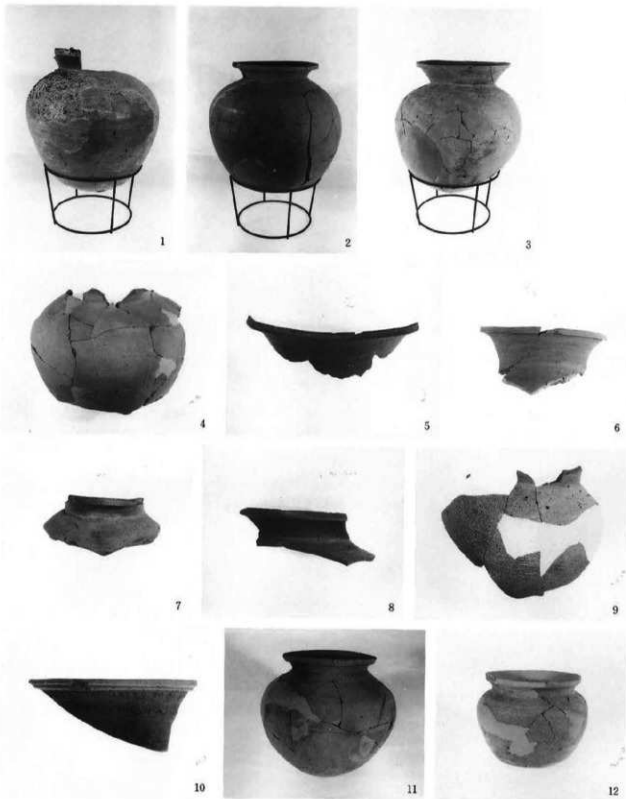
B区 須惠埴 1-13



B区 須惠坏1~15



B区 須惠环16~31



B区 須惠甕 1~12



1



2



3

◀ B区
須惠大型壺
1~4

▼ B区 土師環
1~8



4



1



2



3



4



5



6



7



底部外面



内面



8



9

◀ B区 土師坏9 (高坏)

▼ B区 土師甕 1~6



1



2



3



4



5



6



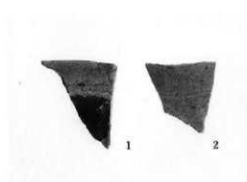
B区 石 (表面)



同 (右側面)



同 (裏面)



(左) B区
鉄製品

(右) B区
ビット遺物



C区住居跡確認状況（東より）



C区住居跡遺物出土状況（北より）



C区住居跡遺物出土状況



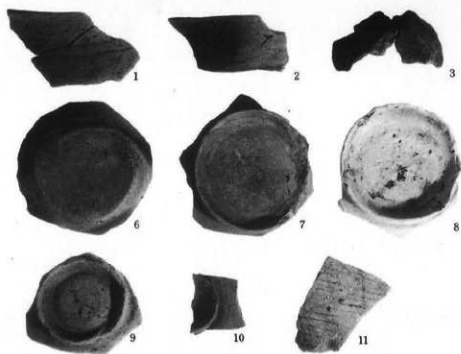
C区住居跡炭化物出土状況 (北より)



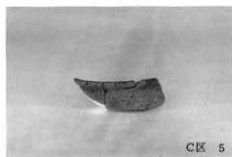
C区1号住居跡カマド



C区住居跡完掘状況（北より）



C区1号住居跡出土遺物





A区掘削前全景（西より）



A区全景（西より）



A区1 トレンチ (西より)



A区2 トレンチ (西より)



A区3 トレンチ (西より)



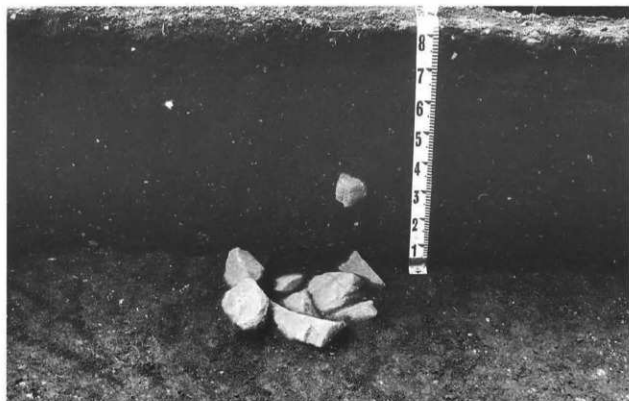
B区掘削風景（南より）



B区グリッド完掘状況（南より）



B区4グリッド (北より)



B区21グリッド集石部検出状況 (東より)

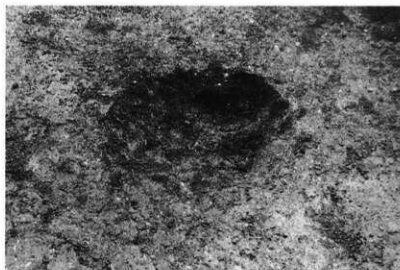
B区21グリッド集石部 (北より)



同 石除去状況 (北より)



同 プラン完掘状況 (北より)





B区作業風景 (南より)

松井田町文化財調査報告書第7集

五料山岸遺跡

～ 上信越自動車道（工事用道路）建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査 ～

平成3年3月30日 発行

編 集：松井田町教育委員会
社会教育課文化財保護係

発 行：松井田町教育委員会

〒379-02 群馬県碓氷郡

松井田町大字新柳1371

TEL 0273 (93) 3335

印 刷：碓氷印刷株式会社